

第181図 製鉄・鍛冶関連遺物 (11)

の鎌身を有し、身と茎の間に篋被状の段がみられる。矢柄と思われる範囲には、木質が残存している。

**遺構外出土遺物 (第172～180図、PL.43～50)** F 40～77は椀形鍛冶滓もしくはその可能性が想定されるものである。そのなかで、メタル度が特L (☆) のものはF 74が該当し、左側部が主破面となっている。上下面とも木炭痕が観察される。

F 53・56・60～65・73・76・77はメタル度L (●) の椀形鍛冶滓である。不整三角形をしたF 53は左側部に破面をもち、下面に径1.5cmほどの木炭を噛み込んでいる。磁着度が高く含鉄鉄滓の可能性もある。F 56は不整五角形をしたほぼ完形の椀形鍛冶滓であり、下面上手寄りには灰白色の炉床土が付着している。F 60・63～65は側部全てに破面をもつ椀形鍛冶滓中核部である。F 63・64は特に磁着度が高く、後者は下面に炉床土の砂礫が付着している。極小の椀形鍛冶滓F 73・76・77のなかで、左側部が主破面となっているF 77は分析資料である (NMH-10)。

F 40・41・49～54・62・70～72・75はメタル度M (◎) である。そのなかで、F 40・41は磁着度がやや高く、全面に木炭痕による凹凸が目立っている。含鉄鉄滓の可能性も想定される。サイズが中型であるF 49～54の椀形鍛冶滓は、ほぼ完形であるF 52を除き側部に破面を有している。F 52は酸化土砂が発達せず、表面は緻密、下面には木炭痕が多くみられる。F 62は小型のほぼ完形の椀形鍛冶滓であり、表面には酸化土砂が発達せず、上面には気孔が多く観察される。極小の椀形鍛冶滓に区分されるF 70は側部全てに破面をもった中核部の破片である。F 71・72・75は左側部に小破面を有し、F 72は上面に気孔が、F 75は木炭痕が認められる。

F 46～48・61・69はメタル度H (○) の椀形鍛冶滓である。F 46～48が中型であり、F 46は全面が厚く酸化土砂に覆われたほぼ完形の椀形鍛冶滓、F 47は表面が緻密であり、下面に木炭痕の窪みが散在している。F 48は上面から右側部にかけて大きな窪みがあり、下面には木炭痕と鍛造剥片が酸化土砂中に混在している。

F 44・45・55・66はメタル度錆化 (△) であり、F 44は左側部に主破面をもって半月状を呈して

いる。上面下手寄りに気孔が発達しているF45はほぼ完形の椀形鍛冶滓である。F55も右側部に小破面がみられるものの、ほぼ完形であり、上下面に木炭痕が散在している。

F57～59・67・68はメタル度なしの椀形鍛冶滓である。いずれも小・極小サイズであり、ほぼ完形であるF58・67、左側部に破面を有しているF59・68がある。いずれも下面に木炭痕が観察される。なお、F57は分析資料である(NMH-9)。

F78～84・86は鍛冶滓、F85は鉄塊系遺物である。メタル度M(◎)のF83・84・86は、いずれも表面に錆膨れが発達し、F84・86は酸化土砂中に放射割れが観察される。F79・81・82はメタル度H(○)、F78・80は錆化(△)である。後者は右側部に木炭が付着している。F85はSB6床面から出土した鉄塊系遺物である。メタル度L(●)であり、分析資料として抽出している(NMH-11)。F87・88はそれぞれ刀子の茎と刃部と思われる。F89は袋状鉄斧であり、袋部の左折り返しの一部が欠損し、刃部は錆膨れにより鍛接部が開いてしまっている。128～135は被熱粘土塊である。胎土は8mm大以下の白色砂粒を含み、脆弱である。凝灰岩製の砥石S43は砥面数3面、線状痕が観察される。S45は安山岩の円礫を利用した石錠である。上面は丸味をもち、下面は平坦である。いずれも被熱によって赤化し、滓も付着している。側部全面に打痕が残っており、とくに下部はその痕跡が顕著で窪みを有している。本遺跡から出土した鉄床石は、平坦面を有した大型のものが多くなかで、本例は小型で円礫側面を利用していることから、鉄床石の可能性は捨て切れないが、石錠と判断した。S46～51は安山岩製の鉄床石もしくは破片である。S47・49は平坦面が鍛打作業によるハネによって、薄く剥離している。S50は板状の礫を利用し、平坦面下半部の荒れた範囲に滓が付着している。S51はサイコロ状をした鉄床石で、側面は大きな剥離面を形成している。これは、打点の方向から鍛打作業によって側面が大きく剥離したものと考えられ、また剥離の方向や切り合い関係などから側面も作業面として使用されていた可能性がある。上部の平坦面には滓が多く付着し、ハネによる荒れが認められる。

以上、遺構内・遺構外出土鉄関連遺物を概観した。まず、鍛冶作業に伴う道具類であるが、石錠2点、鉄床石5点、鉄床石の破片63点、総重量約16kgが出土している。鉄床石・石錠といった石製道具は認められたものの、残念ながら鉄床・鉄槌・鉄鉗・鑽・鑿などの鉄製道具や羽口などは発見されず、道具全体の構成は不明である。ただし、やや時期が遡るが8世紀後半に時期比定されている島根県寺田1遺跡の鍛冶遺構では、鉄鉗、鑿が鉄床石や石錠に伴って出土していることから(坂本2003)、石製道具は当該期においても一定の割合を占めていたものと思われる。

次に、遺物の主体を占める鉄滓類の組成であるが(表61)、個体数でみると流動滓1点、鉄塊系遺物2点、含鉄鉄滓6点、椀形鍛冶滓133点、鍛冶滓187点、再結合滓22点、鉄製品5点、炉壁4点、炉壁溶解物12点、羽口溶解物2点であり、鉄塊系遺物、鍛冶原料となり得る含鉄鉄滓合わせて約2%と著しく低い。また、鉄製品はわずか5点であり、刀子、鉄斧などの工具類が目立ち、農具はみられなかった。これは、調査の主範囲が工房域に該当し、ムラの居住域は調査区南側へ広がる可能性があるため、また鍛冶素材の少なさは操業内容が村方鍛冶程度であったことを示している。(小口)

#### 【参考文献】

坂本論司 2003 「寺田1遺跡の調査と金属生産関連遺物」『第11回フォーラム講演会「山陰における鉄・鉄器生産の諸問題」』(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム

表57 中道東山西山遺跡製鉄・鍛冶関連遺物一覧表（1）

報告書No. 構成No.	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (mm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線透過	取り上げNo.
				長さ	幅	厚さ						
F 7 ①	楕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-10	S B 6-S K 51	29	46	25	31	5	H (○)	平面、縦長の楕形鍛冶滓。右側部に工具によると思われる捻れたような窪みを有している。含鉄部は上手側寄りに主体。	○	1976
F 8 ②	楕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-10	S B 6-S K 51	47	52	37	101.0	4	特L (☆)	平面、不整形の楕形鍛冶滓。上・下手側、左側部に破面を有する。表面は厚い酸化土砂に覆われている。	○	1961
F 9 ③	鍛冶滓 (含鉄)	S-10	S B 6-S K 51	24	13	9	2.2	2	錆化 (Δ)	横方向に不整形に伸びた鍛冶滓。含鉄部は中核部に集中している。	○	2154
F 34 ④	鍛冶滓 (含鉄)	S-10	S B 6-P 9	27	47	17	12.2	4	錆化 (Δ)	平面、弓なり状を呈する鍛冶滓。表面に幅3mmほどの木炭痕がみられる。含鉄部は中核部に集中している。	○	1106
- ⑤	粒状滓	S-10	S B 6-S K 51	-	-	-	-	-	なし	-	-	-
- ⑥	鍛造剥片	S-10	S B 6-S K 51	-	-	-	-	-	なし	-	-	-
S 28 ⑦	石礎	S-10	S B 6-S K 51	16.3	12.3	7.2	1530.0	なし	なし	平面形は、上部が丸味を帯び、下部が窄まる。下部に打痕、右側面上部は打撃による剥離面が観察される。	-	1998
S 27 ⑧	鉄床石	S-10	S B 6-S K 51	18	18	2	0.1	1	なし	径1.0×1.0cmほどの鉄床石破片。表面は鍛打による浅い凹凸が観察される。	-	メッシュ15
F 10 ⑨	楕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	37	37	33	30.4	4	錆化 (Δ)	左側部に主破面を持つ不整形をした楕形鍛冶滓。上手側左側部寄りから下面にかけて径1cmほどの錆膨れが認められる。表面には径8mm大の木炭と鍛造剥片を噛み込んでいる。	○	2099
F 11 ⑩	楕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	33	31	22	17.0	4	H (○)	平面、不整形五角形をした楕形鍛冶滓。全面部に破面が確認されることから滓の中核部と思われる。全面酸化土砂に覆われ、左側部と下面に錆膨れがみられる。	○	2094
F 30 ⑪	楕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-9	S B 7-P 2	40	39	27	57.0	5	L (●)	平面、不整形円形をした楕形鍛冶滓。上・下面のみ生きており、側部は全て破面である。下面の酸化土砂の表面に放射割れが生じている。	○	898
F 12 ⑫	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	25	32	26	4.9	3	錆化 (Δ)	平面、T字状を呈する鍛冶滓。含鉄部は上手側下面に集中する。	○	2095
F 13 ⑬	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	23	27	9	5.6	3	錆化 (Δ)	平面、不整形三角形をした鍛冶滓。下手側と下面に径8mm大の礫や青光した鍛造剥片が多く付着している。	○	2444
F 14 ⑭	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	34	24	17	8.1	2	錆化 (Δ)	平面、不整形三角形をした鍛冶滓。左右側部と下面に錆膨れ発達。含鉄部は上手側下面に集中。	○	2446
F 15 ⑮	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	24	35	18	10.6	3	H (○)	平面、縦長の不整形をした鍛冶滓。全面酸化土砂に厚く覆われ、錆膨れもみられる。下面は丸味を帯び含鉄部は散在している。	○	2170
F 16 ⑯	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	S B 7-S K 52	19	31	16	6.4	4	H (○)	平面、縦長の不整形四角形をした鍛冶滓。右側部下側部は生きており、下面に径5mmほどの礫付着。全面酸化土砂に覆われている。	○	2445
F 31 ⑰	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	S B 7-P 2	13	16	13	2.9	2	M (◎)	平面、不整形三角形をした小さな鍛冶滓。右側部には酸化土砂の放射割れが生じている。	○	995
126 ⑱	炉壁 (鍛冶滓・鍛造剥片付着)	S-9	S B 7-S K 52	30	36	22	16.2	3	なし	平面、台形をした炉壁破片。胎土は径3mm以下の白色砂礫を含む。上手側には径3mmほどの鍛造剥片、上手側から下面にかけて径20×25mmの鍛冶滓が付着している。	○	2092
F 17 ⑲	再結合滓	S-9	S B 7-S K 52	25	24	11	5.1	3	なし	平面、不整形円形。表面は鉄床石付着痕がみられ、下面には径8mmほどの礫、径6mm以下の鍛造剥片が多く付着している。	○	2292
- ⑳	粒状滓	S-9	S B 7-S K 52	-	-	-	-	-	なし	分析資料No.1。詳細観察表参照。	-	-
- ㉑	鍛造剥片	S-9	S B 7-S K 52	-	-	-	-	-	なし	分析資料No.2。詳細観察表参照。	-	-
F 18 ㉒	鉄製品 (鍛造品)	S-9	S B 7-S K 52	22	13	15	2.4	1	なし	横断面が方形となる棒状の鉄製品破片。全面が酸化土砂に覆われているため明瞭でないが、上下面に平坦面を形成している。	○	2289
S 29 ㉓	鉄床石 (滓付き)	S-9	S B 7-S K 52	35	40	5	9.7	1	なし	ほぼ作業面中心の鉄床石破片。表面は鍛打による凹凸を有している。径1.3×1.3cmの範囲に滓多く付着。取り上げNo.1517・1524が接合。	-	1517・1524
S 30 ㉔	鉄床石 (滓付き)	S-9	S B 7-S K 52	47	43	6	13.8	1	なし	作業面中心から縁辺にかけての鉄床石破片。表面は鍛打による凹凸がみられ、径1.2×1.2cmの範囲に滓多く付着。取り上げNo.1272・2123が接合。	-	1272・2123
S 31 ㉕	鉄床石 (滓付き)	S-9	S B 7-S K 52	45	42	7	11.8	2	なし	平坦面に鍛打による凹凸を有する鉄床石破片。径1.2×1.5cmの範囲に滓多く付着。	-	1155
S 32 ㉖	鉄床石 (滓付き)	S-9	S B 7-S K 52	42	48	8	10.0	なし	なし	作業面中心から縁辺にかけての鉄床石破片。表面下部約1/3の範囲に鍛打による凹凸が観察される。	-	2107
F 26 ㉗	楕形鍛冶滓 (小・含鉄)	S-9	S B 7-S K 70	45	48	30	70.0	5	M (◎)	上手側と左側部の一部に破面を有する楕形鍛冶滓。上面はほぼ水平であり木炭痕が点在している。下面上手寄り放射割れ有り。	-	899
S 44 ㉘	鉄床石 (滓付き)	S-9	S B 7-S K 70	90	55	23	98.5	1	なし	亜円礫の剥片。右側縁部約1.5×2.0cmの範囲に滓付着。	-	988
F 19 ㉙	含鉄鉄滓	T-9	S K 53	34	49	30	57.5	5	特L (☆)	分析資料No.3。詳細観察表参照。	○	338
F 20 ㉚	鍛冶滓 (含鉄)	T-9	S K 53	22	31	16	10.6	4	錆化 (Δ)	平面、不整形六角形をした鍛冶滓。下半部に含鉄部集中している。右側部下手寄りに木炭痕有り。	○	339
F 21 ㉛	楕形鍛冶滓 (小・含鉄)	Q・R-14	S S 3	42	33	26	36.2	2	なし	平面、不整形円形をした楕形鍛冶滓。右側部と上手側部以外は破面。表面に木炭痕が散在している。	○	1213
F 22 ㉜	楕形鍛冶滓 (小・鉄床石付き)	Q・R-14	S S 3	37	57	28	56.5	3	なし	平面、縦長の不整形四角形をした楕形鍛冶滓。左右側部が主破面となっており、右側部から下面にかけて径2.8×1.8cmの鉄床石が付着している。	○	1230
F 23 ㉝	楕形鍛冶滓? (中・含鉄)	Q・R-14	S S 3	51	33	31	71.5	3	M (◎)	平面、不整形円形をした楕形鍛冶滓?。右側部と下面以外は破面。含鉄部は全体的に散在している。下面に木炭痕が目立つ。	○	1211
F 24 ㉞	含鉄鉄滓	Q・R-14	S S 3	47	66	33	122.0	5	特L (☆)	分析資料No.4。詳細観察表参照。	○	1061
F 28 ㉟	含鉄鉄滓	Q・R-14	S S 3	35	48	21	39.0	3	H (○)	分析資料No.5。詳細観察表参照。	○	1288
F 25 ㊱	楕形鍛冶滓 (小・含鉄)	Q・R-14	S S 3	50	30	24	42.8	5	錆化 (Δ)	平面、長方形をした楕形鍛冶滓。上・下手側は破面である。下面に木炭痕が散在する。全面酸化土砂に覆われ、下面には径5mm以下の砂粒が付着している。	○	1215
F 27 ㊲	鍛冶滓 (含鉄)	Q・R-14	S S 3	23	21	15	7.5	4	M (◎)	平面、T字状を呈した鍛冶滓。左右側部に錆膨れが発達し、下面には酸化土砂の表面に放射割れを生じている。含鉄部は上下面に散在している。	○	1057
128 ㊳	被熱粘土塊	S-9	S K 78	52	32	25	27.8	なし	なし	上下面はほぼ平坦面を形成している。胎土は径8mm以下の白色砂礫を含み、また植物質の圧痕が認められる。	-	985

表58 中道東山西山遺跡製鉄・鍛冶関連遺物一覧表(2)

報告書No. 構成No.	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (mm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線透過	取り上げNo.
				長さ	幅	厚さ						
129 ③⑨	被熱粘土塊	S-9	SK78	49	42	37	41.4	なし	なし	平面形は不整形三角形をしている。下面は緩やかに傾斜して植物質圧痕がみられる。胎土は径5mm以下の白色砂礫を含んでいる。	-	981(1)
130 ④⑩	被熱粘土塊	S-9	SK78	55	40	28	31.2	なし	なし	下面は平坦面を形成している。径3mmほどの白色砂礫を含む。上面には植物質圧痕がみられる。	-	981(2)
S42 ④⑪	砥石(鉄錆付き)	T-10	S B 5 - P 5	△42	24	51	85.0	なし	なし	平面形は撥形を呈しているが、一部欠損。4面が砥面であり、表面に鉄錆が付着している。	-	353
F29 ④⑫	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	T-9	P235	55	31	36	78.5	5	錆化(△)	平面、不整形円形をした梘形鍛冶滓。上・下側が主破面であり、左側部上面寄りも小破面となっている。表面を薄い酸化土砂が覆っている。	○	433
F32 ④⑬	鉄製品(鍛造品)	S-10	P374	105	6	4	14.2	3	錆化(△)	断面が四角形をした棒状製品の破片。軸のほぼ中心に長さ4cmほどの木質部が覆っている。	○	1006
F33 ④⑭	鍛冶滓(含鉄)	S-11	P387	32	48	30	25.6	5	L(●)	左側部に窪みを有する鍛冶滓。上手側下面は酸化土砂が厚く覆っている。含鉄部は散在している。	○	1191
F35 ④⑮	流動滓(製錬系)	R-10	P422	35	36	24	34.6	3	なし	分析資料No.6。詳細観察表参照。	○	1195
F36 ④⑯	含鉄鉄滓	R-10	P422	15	29	12	13.0	4	錆化(△)	分析資料No.7。詳細観察表参照。	○	1194
F37 ④⑰	鉄塊系遺物	S-10	P890	42	31	19	24.2	5	H(○)	平面、横長の不整形四角形をした鉄塊系遺物。表面に薄く固着する酸化土砂中に径5mm以下の白色砂礫を多く含む。上面左側部上手寄りと下側部に錆膨れを有する。含鉄部は右側部から下面に集中している。	○	2002
F38 ④⑱	鍛冶滓(含鉄)	S-10・11	P962	43	29	27	22.4	5	錆化(△)	平面、不整形五角形をした鍛冶滓。表面には厚く酸化土砂が固着し、上手側部と左側部に木炭を噛み込んでいる。	○	2513
F39 ④⑲	鍛冶滓(含鉄)	S-10・11	P962	32	27	15	14.0	3	H(○)	平面、不整形五角形をした薄い鍛冶滓。表面には薄い酸化土砂が覆っているが平滑である。含鉄部は散在している。	○	2450
127 ⑤⑰	炉壁	S-11	暗褐色土	48	68	41	97.0	2	なし	灰白色の滓が溶着した炉壁片。ほぼ全面が破面であり、左側部と下手側はガラス化して黒色を呈している。	○	360
F40 ⑤⑱	梘形鍛冶滓? (中・含鉄)	R-11	暗褐色土	56	58	41	164.0	6	M(◎)	平面、四角形をした梘形鍛冶滓?。右側部と下手側部の一部が破面となっている。上面中心部に窪みがあり、径5mmほどの小塊が上・下面に付着している。また、全面木炭痕による凹凸が目立つ。	○	1187
F41 ⑤⑲	梘形鍛冶滓? (中・含鉄)	S-8	暗褐色土	70	70	42	188.0	7	M(◎)	左側部に主破面を有する梘形鍛冶滓?。上下面には木炭痕による深い凹凸が散在する。	○	896
F42 ⑤⑳	梘形鍛冶滓? (中・含鉄)	R-10	暗褐色土	70	94	42	349.0	6	L(●)	平面、不整形三角形をした梘形鍛冶滓?。上手側に2箇所の小破面、左側部が主破面である。表面は厚く酸化土砂が固着し、下面と右側部に放射割れが確認される。また、下面には径1.5×1.3cmの木炭を噛み込んでいる。	○	1171
F43 ⑤㉑	含鉄鉄滓	S-8	暗褐色土	59	100	52	362.0	7	特L(★)	分析資料No.8。詳細観察表参照。	○	897
F44 ⑤㉒	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-10	暗褐色土	44	89	32	153.0	6	錆化(△)	左側部に主破面を持つ半月状の梘形鍛冶滓。上面はほぼ平坦で、下面は木炭痕による凹凸が多い。	○	140
F45 ⑤㉓	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-10	暗褐色土	83	109	45	317.0	6	錆化(△)	平面、不整形五角形気味のほぼ完形の梘形鍛冶滓。上面上手側には気孔が発達している。	○	1193
F47 ⑤㉔	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-12	暗褐色土	53	57	35	151.0	5	H(○)	表面は酸化土砂が覆っていない緻密な梘形鍛冶滓。右側部下面寄りが生きており、その他は主破面となる。上面はほぼ平坦で、下面は木炭痕の窪みが点在する。	○	965
F46 ⑤㉕	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-11	暗褐色土2	94	103	50	425.0	4	H(○)	全面が酸化土砂に覆われたほぼ完形の梘形鍛冶滓。下面には木炭痕がみられ、含鉄部は右側部に集中する。	○	2546
F48 ⑤㉖	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	Q-12	暗褐色土2	62	76	29	135.0	5	H(○)	平面、不整形長方形をした梘形鍛冶滓。上面から右側部が大きく窪む。下面には粉炭と鍛造剥片が酸化土砂中に混在している。	○	2565
F49 ⑤㉗	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-9	攪乱土	45	46	30	79.5	5	M(◎)	上面以外に破面を持つ梘形鍛冶滓の中核部。全面に薄く酸化土砂が覆い、左側部から下面にかけて放射割れが認められる。	○	1466
F50 ⑤㉘	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-10	暗褐色土	30	54	32	71.0	6	M(◎)	平面、不整形三角形をした梘形鍛冶滓。側部全てが破面であり、左側部には酸化土砂表面の放射割れがみられる。	○	1671
F51 ⑤㉙	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-9	暗褐色土	45	57	37	106.0	7	M(◎)	上面、側部が厚く酸化土砂に覆われた梘形鍛冶滓の中核部。上面に木炭痕が点在している。右側部のみが生きておりその他は破面となっている。	○	1678
F52 ⑤㉚	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	Q-11	暗褐色土	58	97	32	160.0	6	M(◎)	左側部の一部に破面を有するほぼ完形の梘形鍛冶滓。全体的に酸化土砂が発達せず緻密である。下面は梘形を呈し、長さ1cmほどの木炭痕が多く認められる。	○	1313
F54 ⑤㉛	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	R-11	暗褐色土	65	85	30	186.0	5	M(◎)	左側部に主破面を有する梘形鍛冶滓。上面中心部は緩やかに窪み、上下面とも8mmほどの木炭痕が多く認められる。	○	1183
F53 ⑤㉜	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	Q-12	暗褐色土2	59	70	39	190.0	5	M(◎)	平面、不整形五角形をした梘形鍛冶滓の中核部。左側部上手寄りと右側部下手寄りは生きているが、その他は破面である。上面には木炭痕が点在する。	○	2501
F56 ⑤㉝	梘形鍛冶滓 (中・含鉄)	Q-12	暗褐色土2	86	112	38	434.0	6	L(●)	平面、不整形五角形を呈するほぼ完形の梘形鍛冶滓。上面上手寄りには緩やかな窪みがみられ、部分的に酸化土砂が固着している。下面は梘形を呈し、上手寄りには灰白色の炉床土が付着し、下手寄りには木炭を噛み込んでいる。	○	2559
F58 ⑤㉞	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	R-11	暗褐色土	68	90	36	184.0	5	なし	平面、不整形五角形を呈するほぼ完形の梘形鍛冶滓。左側部の一部が破面となっている。上面上手側には木炭痕の深い窪みがあり、また緩やかな梘形を呈した下面には、細かい木炭痕が多くみられる。	○	1180
F57 ⑤㉟	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	R-11	暗褐色土	71	68	37	190.0	5	なし	分析資料No.9。詳細観察表参照。	○	1182
F59 ⑤㊱	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	Q-12	暗褐色土	61	86	35	201.0	3	なし	左側部に主破面を有する梘形鍛冶滓。上面には木炭痕による凹凸が散在し、下面には長さ1cm以下の木炭痕が多くみられる。	○	1711
F55 ⑤㊲	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	R-11	暗褐色土	77	72	35	192.0	5	錆化(△)	平面、六角形をした梘形鍛冶滓。右側部上手寄りに小破面を持つ。全体的に酸化土砂が未発達であり、上面には径3mmの気孔が散在している。上下面に浅い木炭痕が認められる。	○	955
F61 ⑤㊳	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	R-11	暗褐色土	67	70	31	110.0	6	H(○)	上手側左側部が大きく窪んだ不整形の梘形鍛冶滓。右側部の一部と左側部の上面に小破面が確認される。左側部の窪みは工具等により掘り上げられたものか。上手側には酸化土砂が発達し、下面には炉床土が付着している。	○	2140(1)
F62 ⑤㊴	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	Q-12	暗褐色土	62	71	33	132.0	5	M(◎)	平面、不整形五角形をしたほぼ完形の梘形鍛冶滓。表面の酸化土砂が発達せず、上面には径2mmほどの気孔が多く観察される。上下面には木炭痕による凹凸が点在する。	○	961
F60 ⑤㊵	梘形鍛冶滓 (小・含鉄)	S-11	暗褐色土	38	37	29	53.5	5	L(●)	平面、不整形三角形をした梘形鍛冶滓の中核部。側部の全てが破面を形成し、上面に径1cmほどの錆膨れを有する。	○	912

表59 中道東山西山遺跡製鉄・鍛冶関連遺物一覧表（3）

報告書No. 構成No.	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (mm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備 考	X線透過	取り上げNo.
				長さ	幅	厚さ						
F 63 ⑦④	梲形鍛冶滓 (小・含鉄)	P-6	暗褐色土	40	48	35	72.5	7	L (●)	平面、不整三角形をした梲形鍛冶滓。全ての側部が破面であり、右側部に錆跡がみられる。また、右側部の窪みに木炭を噛み込んでいる。	○	2052
F 64 ⑦⑤	梲形鍛冶滓 (小・含鉄)	Q-12	暗褐色土	35	51	51	85.5	6	L (●)	全ての側部が破面となっている梲形鍛冶滓の中核部。下面の一部に炉床土の砂礫が付着。上下面とも含鉄部が分散している。	○	2138(2)
F 65 ⑦⑥	梲形鍛冶滓 (小・含鉄)	R-11	暗褐色土	42	50	38	94.5	3	L (●)	側部の全てが破面となっている梲形鍛冶滓の中核部。下手側には径1~2cmほどの木炭を噛み込んでいる。酸化土砂があまり発達せず、右側部破面には気孔が散在している。	○	2545
F 67 ⑦⑦	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-11	暗褐色土	36	47	28	53.0	3	なし	表面の酸化土砂が未発達の梲形鍛冶滓。ほぼ完形であり、下面を中心に径4mm以下の気孔が多くみられる。	○	949
F 68 ⑦⑧	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	R-11	暗褐色土	59	62	27	84.0	4	なし	左側部に主破面を持つ梲形鍛冶滓。酸化土砂は発達せず、上面には径5mmほどの気孔が、下面には木炭痕が点在している。	○	968
F 66 ⑦⑨	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-12	不明	28	27	17	10.6	5	錆化(Δ)	平面、不整四角形をした極小の梲形鍛冶滓。左側部が主破面となる。上面には径5mmほどの木炭痕を有している。	○	2639
F 69 ⑧⑩	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	Q-12	褐色土	40	51	25	40.2	5	H (○)	表面が厚く酸化土砂に覆われた梲形鍛冶滓。酸化土砂で不明瞭であるが、恐らく左側部が主破面になると思われる。右側部に錆跡有り。	○	2138(1)
F 70 ⑧⑪	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	R-11	暗褐色土	23	33	21	18.0	5	M (◎)	平面、不整三角形をした梲形鍛冶滓の中核部。上手側部から下面にかけて酸化土砂の表面に放射割れが生じている。	○	1178
F 71 ⑧⑫	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	P-13	暗褐色土	38	44	30	45.8	5	M (◎)	左側部に主破面を持つ極小の梲形鍛冶滓。また、下手側と下面に小破面を有する。	○	1604
F 72 ⑧⑬	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	R-9	暗褐色土	44	45	24	56.0	3	M (◎)	左側部と下手側部に破面を持った梲形鍛冶滓。上面には径5mmほどの気孔が散在している。上手側から右側部にかけて含鉄部が集中している。	○	1432
F 75 ⑧⑭	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	R-11	暗褐色土	51	56	26	94.5	6	M (◎)	平面、不整円形をしたほぼ完形の梲形鍛冶滓。左側部上手寄りに小さな破面を有する。上面には木炭痕が多く認められる。	○	1685
F 76 ⑧⑮	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-10	暗褐色土	55	48	30	103.0	4	L (●)	上手側と下手側上手寄りの縁辺に破面を有する極小の梲形鍛冶滓。上面はほぼ平坦であり、下面はきれいな梲形を呈している。上下面とも木炭痕の浅い窪みが点在している。	○	2602
F 73 ⑧⑯	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	R-10	暗褐色土	33	30	23	29.2	4	L (●)	平面、不整五角形をした極小の梲形鍛冶滓。上手側部以外の側面は全て破面である。下面は酸化土砂表面の放射割れが認められる。左側部の磁着弱い。	○	1199
F 77 ⑧⑰	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	S-10	暗褐色土	39	55	27	51.0	5	L (●)	分析資料No.10。詳細観察表参照。	○	946
F 74 ⑧⑱	梲形鍛冶滓 (極小・含鉄)	R-11	暗褐色土	38	45	24	48.8	3	特L(★)	左側部に主破面を有する梲形鍛冶滓。下手側右寄りにも小破面が確認される。上下面には木炭痕がみられ、含鉄部は下面に集中する。	○	1176
F 80 ⑧⑲	鍛冶滓 (含鉄)	R-9	攪乱土	25	23	13	5.9	3	錆化(Δ)	平面、不整三角形を呈する鍛冶滓。左側部に主破面を持つ。右側部には径5mmほどの木炭が付着している。	○	1812(1)
F 78 ⑨⑰	鍛冶滓 (含鉄)	R-9	攪乱土	27	18	15	8.1	4	錆化(Δ)	横方向に不定形に伸びた鍛冶滓。全面酸化土砂に覆われているため不明瞭であるが、左右側部と下手側は破面と思われる。	○	1812(2)
F 81 ⑨⑱	鍛冶滓 (含鉄)	R-11	褐色土	27	32	12	13.0	4	H (○)	縁辺が丸味を帯びる含鉄の鍛冶滓。下面中心部にやや厚い酸化土砂が固着している。	○	2140(2)
F 79 ⑨⑲	鍛冶滓 (含鉄)	R-10	暗褐色土	23	30	17	9.8	5	H (○)	平面、C字状を呈する鍛冶滓。下面に径5mmほどの木炭痕がみられる。上手側部は磁着強い。下手側は錆跡が発達し伸びている。	○	1172
F 82 ⑨⑳	鍛冶滓 (含鉄)	S-10	暗褐色土	30	46	21	18.4	5	H (○)	平面、樹枝状を呈する鍛冶滓。上手側は錆跡が発達している。含鉄部は下手側に集中する。	○	1094
F 83 ⑨㉑	鍛冶滓 (含鉄)	R-11	褐色土	40	23	12	16.0	5	M (◎)	平面、不整楕円形をした鍛冶滓。ほぼ全面酸化土砂に覆われ、上手側肩部に錆跡を有する。上手側右寄りと右側部は破面である。含鉄部は右側部に集中。	○	2140(3)
F 84 ⑨㉒	鍛冶滓 (含鉄)	不明	廃土中	23	25	20	13.6	5	M (◎)	平面、不整三角形の鍛冶滓。全面にわたり錆跡が発達し、下面に放射割れがみられる。上面のみ生きており、その他は破面である。下面上手側に含鉄部集中。	○	927
F 86 ⑨㉓	鍛冶滓 (含鉄)	S-9	暗褐色土	25	28	17	13.8	4	M (◎)	全面、酸化土砂に覆われた鍛冶滓。左側部上手寄りに小破面を有している。上面から右側部の酸化土砂表面に放射割れが生じている。下面磁着強い。	○	900
F 85 ⑨㉔	鉄塊系遺物	S B 6	暗褐色土	24	30	15	13.6	5	L (●)	分析資料No.11。詳細観察表参照。	○	906
F 87 ⑨㉕	鉄製品(鍛造品)	R-12	暗褐色土2	41	15	8	8.9	2	錆化(Δ)	横断面形が方形となる棒状の鉄製品破片。上・下手側に2mmほどの平坦面がみられることから刀子の茎と想定される。	○	2470
F 88 ⑨㉖	鉄製品(鍛造品)	Q-13	暗褐色土	27	9	4	2.9	2	錆化(Δ)	横断面形がV字状になる棒状の鉄製品破片。下面に錆跡がみられる。左方向の幅が狭くなることから刀子の先端部の可能性が高い。	○	85
F 89 ⑨㉗	鉄製品(鍛造品)	P-13	暗褐色土	71	40	4	72.0	6	H (○)	ほぼ完形の袋状鉄斧。袋部の左側折り返しの一部が欠損している。刃部は錆跡により、鍛冶部が開いてしまっている。背部に径1cmほどの錆跡有り。	○	62
S 45 ⑩⑰	石錠	P-10	暗褐色土	123	63	57	510.0	なし	なし	左側面が幅広の平面形を呈している。左側面以外ほぼ全面に打痕を有している。とくに長軸下面が顕著であり、窪みを形成している。被熱により、表面が赤化している。	-	2039
S 43 ⑩⑱	砥石	R-12	暗褐色土	Δ58	55	34	120.0	なし	なし	楕円形を呈する砥石の基部か。砥面は3面確認され、線状痕が多くみられる。先端部欠損。	-	2469
S 46 ⑩㉑	鉄床石(滓付き)	R-11	暗褐色土	Δ77	Δ20	Δ45	44.0	なし	なし	平面、三角形を呈する鉄床石破片。表面は鍛打により凹凸が目立ち、下部を中心に滓が付着している。	-	2458
S 47 ⑩㉒	鉄床石	Q-12	暗褐色土	130	138	72	1120.0	なし	なし	平面、台形状を呈する鉄床石。平坦面の広い範囲にわたって鍛打痕が認められる。上部側面は礫面、側面と底面は折損している。	-	1718
S 48 ⑩㉓	鉄床石(滓付き)	R-12	暗褐色土	Δ101	Δ100	Δ48	340.0	なし	なし	平面、台形状を呈する鉄床石破片。表面は全体的に平滑化しているが、上部に鍛打痕と滓が付着している。	-	2021
S 49 ⑩㉔	鉄床石	Q-12	暗褐色土	Δ70	Δ80	Δ61	460.0	1	なし	平面、台形状の鉄床石。表面と下手側側面は鍛打による剥離がみられる。上面、左右側面は折損。	-	2561
S 50 ⑩㉕	鉄床石(滓付き)	R-10	暗褐色土	228	88	207	4770.0	なし	なし	平面、五角形の鉄床石。No.1673に比べ薄く作業面が広い。上面下方に鍛打痕を有し、滓が付着している。左右側部と下面は折損。	-	1674
S 51 ⑩㉖	鉄床石(滓付き)	Q-10	暗褐色土	Δ180	Δ175	Δ165	7330.0	1	なし	平面、五角形の鉄床石。上面に鍛打痕と滓が付着している。正面・裏面の一部および下面以外は直接打撃による剥離が行われている。	-	1673
131 ⑩㉗	被熱粘土塊	R-12	暗褐色土	61	49	26	41.6	なし	なし	上面、側面は平坦面を形成し、それ以外は破損面の被熱粘土塊。胎土は径3mm以下の白色砂礫を多く含む。焼成不良。	-	2540
132 ⑩㉘	被熱粘土塊	R-10	暗褐色土	38	40	25	28.2	なし	なし	正面以外は全て欠損した被熱粘土塊。胎土はスサと径1mm以下の白色砂礫を多く含む。焼成不良。	-	1828

表60 中道東山西山遺跡製鉄・鍛冶関連遺物一覧表（4）

報告書No. 構成No.	遺物名	地区名	遺構名	計測値 (mm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考	X線透過	取り上げNo.
				長さ	幅	厚さ						
133 ㉑	被熱粘土塊	R-10	暗褐色土	66	31	32	35.6	なし	なし	板状の被熱粘土塊。上部には幅5mmほどのスサ痕がみられる。焼成不良。	-	1827
134 ㉒	被熱粘土塊	R-10	暗褐色土	70	60	45	99.0	なし	なし	やや厚みを有する板状の被熱粘土塊。上・下面にはスサの混入痕がみられ、径1cm以下の白色砂礫を多く含む。焼成不良。	-	1823
135 ㉓	被熱粘土塊	R-13	暗褐色土	63	50	36	77.0	なし	なし	やや厚みを有する板状の被熱粘土塊。側部破面には黒化層認められる。胎土は径8mm以下の砂礫、スサを含んでいる。焼成不良。	-	2485
S33	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	36	23	6	3.9	なし	なし	作業面に厚く滓が付着した鉄床石破片。表面は、鍛打によって荒れている。SK70出土No.1130とSK52出土1522が接合。	-	1130・1522
S34	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	38	22	4	2.9	なし	なし	平面三角形をした鉄床石破片。表面は、鍛打によって荒れており、滓が散在して付着している。	-	2087
S35	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	23	29	4	2.1	なし	なし	平面五角形をした鉄床石破片。表面には3条ほどの線状痕があり、滓が付着している。	-	2088
S36	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	17	13	3	1.1	なし	なし	表面が被熱で赤化した鉄床石破片。滓が散在して付着している。	-	1629
S37	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	20	14	2	1.0	なし	なし	表面が、鍛打によって薄く剥離しており、滓が付着した鉄床石破片。	-	2086
S38	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	22	21	5	3.1	なし	なし	平面四角形をした鉄床石破片。滓が中心部に厚く、付着している。	-	2295
S39	鉄床石(滓付き)	S-9	SB7-SK52	25	14	6	2.0	なし	なし	表面中心部に滓が付着した鉄床石破片。	-	2128
S40	鉄床石	S-9	SB7-SK52	36	24	4	4.1	なし	なし	表面に鍛打による荒れが認められる鉄床石破片。	-	2124
S41	鉄床石	S-9	SB7-SK52	42	31	8	9.8	なし	なし	表面に鍛打による荒れが認められる鉄床石破片。	-	1637

※椀形鍛冶滓の大きさは完形推定で、以下の通り分類を行っている。  
 (大): 1000g以下 (中): 500g以下 (小): 250g以下 (極小): 125g以下

表61 中道東山西山遺跡製鉄・鍛冶関連遺物組成一覧表

遺物名	メタル度	数量	重量 (g)
鉄塊系遺物	L (●)	1	13.6
	H (○)	1	24.2
合計		2	37.8
椀形鍛冶滓	特L (☆)	2	149.8
	L (●)	10	1329.2
	M (◎)	15	1632.3
	H (○)	7	909.2
	錆化 (△)	30	2703.2
	なし	69	4058.0
合計		133	10781.7
鍛冶滓	特L (☆)	0	0.0
	L (●)	1	25.6
	M (◎)	5	53.8
	H (○)	6	72.2
	錆化 (△)	14	116.5
	なし	161	685.0
合計		187	953.1
含鉄鉄滓	特L (☆)	3	541.5
	L (●)	0	0.0
	M (◎)	0	0.0
	H (○)	1	39.0
	錆化 (△)	2	38.4
	なし	0	0.0
合計		6	618.9
流動滓	なし	1	34.6
合計		1	34.6

再結合滓	5.88%
鉄製品	1.34%
炉壁	1.07%
炉壁溶解物	3.21%
羽口溶解物	0.53%
流動滓	0.27%
鉄塊系遺物	0.53%
含鉄鉄滓	1.60%
椀形鍛冶滓	35.56%
鍛冶滓	50.00%

再結合滓	0.36%
鉄製品	0.79%
炉壁	0.97%
炉壁溶解物	0.55%
羽口溶解物	0.04%
流動滓	0.27%
鉄塊系遺物	0.30%
含鉄鉄滓	4.85%
椀形鍛冶滓	84.41%
鍛冶滓	7.46%

遺物名	数量
流動滓	1
鉄塊系遺物	2
含鉄鉄滓	6
椀形鍛冶滓	133
鍛冶滓	187
再結合滓	22
鉄製品	5
炉壁	4
炉壁溶解物	12
羽口溶解物	2
合計	374

遺物名	重量 (g)
流動滓	34.6
鉄塊系遺物	37.8
含鉄鉄滓	618.9
椀形鍛冶滓	10781.7
鍛冶滓	953.1
再結合滓	46.6
鉄製品	100.4
炉壁	123.5
炉壁溶解物	70.5
羽口溶解物	5.4
合計	12772.5

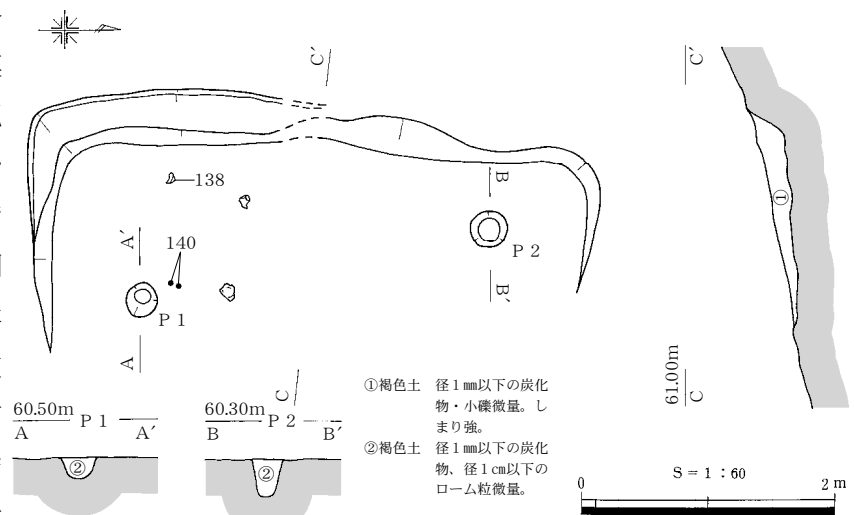
第6節 その他

S S 1 (第182～184図、表62・63、PL.16)

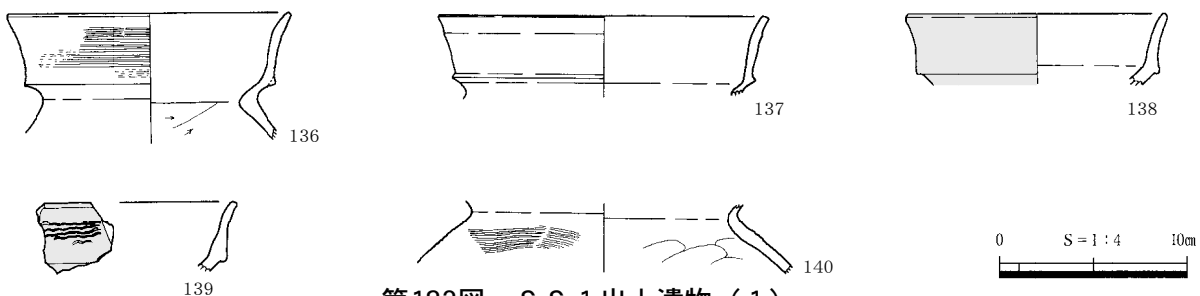
D15グリッド、標高60.5mの緩斜面に位置し、規模・形態は長軸4.5m、短軸2.06mの方形で検出面からの深さは20cmを測る。床面はXI層を掘り込んだ面を平坦化し、直接床とする。埋土の堆積状況は自然堆積の様相を示す。床面には径30cm、深さ16～22cmのピットが付属する。柱痕が確認できないため、柱穴とは判断しがたい。遺物は埋土および床面より清水編年VI-1・2様式に比定される土器や石器が出土し6点を図示した。時期は出土遺物より弥生時代終末期～古墳時代初頭が想定される。なお、周辺において当該期の遺構はS I 1のみであるが、本遺構は調査区北側縁辺部に位置することを考慮すると、遺跡範囲が調査区外に広がる可能性があることを留意する必要がある。(福井)

S S 2 (第185・186図、表64、PL.16・35・36)

O・P13グリッド、標高67.2～67.5mの東向き斜面に位置する。底面検出後にS B 3-P1と重複することを把握したが、両者の埋土は近似していたため、正確な切り合い関係は不明である。南半部はV層下位まで掘り下げた最終精査の段階で確認したため、規模が小さい。検出できた平面形は瓢箪形を呈す。埋土中から土師器台付皿141・坏142が、底面付近で円礫が出土した。円礫は遺構東側から流れ込んでおり、S S 2は本来的には浅い土坑状の遺構で、東側の立ち上がりは流失している可能性もある。出土遺物は伯耆国庁編年第2段階S D 37様式に比定されるため、平安時代前期、9世



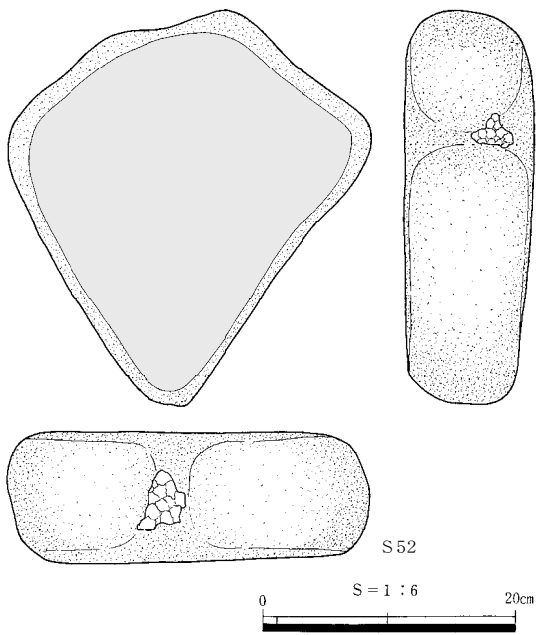
第182図 S S 1



第183図 S S 1 出土遺物 (1)

表62 S S 1 出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
136	SS1 1層	弥生土器 甕	※14.6 △6.2	口縁部1/4 以下	外面：口縁部8～11条の多条平行沈線後ナデ消し、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密 2mm以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
137	SS1 埋土	弥生土器 甕	※16.8 △4.0	口縁部1/4 以下	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 1mm以下の灰色砂粒、雲母	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	良好	
138	SS1 埋土	弥生土器 甕	※13.2 △3.3	口縁部1/4 以下	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 2mm以下の砂粒	外面：橙色 内面：灰色	良好	外面赤色塗彩、 摩滅顕著
139	SS1 埋土	弥生土器 甕	— △3.7	口縁部1/4 以下	外面：口縁部貝殻腹縁による波状文、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 2mm以下の黒色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩
140	SS1 1層	弥生土器 甕	— △3.4	肩部1/4 以下	外面：頸部ヨコナデ、肩部貝殻腹縁による平行沈線 内面：頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 2mm以下の砂粒	外面：淡褐色 内面：淡褐色	良好	



第184図 S S 1 出土遺物 (2)

紀中頃の遺構と考えられる。

(高尾)

SD 1 (第187・188図、表65、PL.21・35)

〇8・9グリッド、標高69.5m~70.1mの西側へ下る斜面地に位置する。当遺構は西端でSK88を切る。

VI層精査中、等高線を東西に横切る9mほどの細長い暗褐色土のプランを検出した。南北にサブトレンチ(A-A'、B-B'ライン)を設定し掘り下げたところ、断面U字状の掘り方と遺物を検出した。長さ8.5m、幅0.4~1.0m、深さ20cm以下を測る。断面の形状は不整U字状を呈し、東西方向に走る。東端と西端の底面の高低差は0.5mで、自然地形に沿って西側が低くなっている。埋土は暗褐色土を主体とする単層である。遺物は、埋土

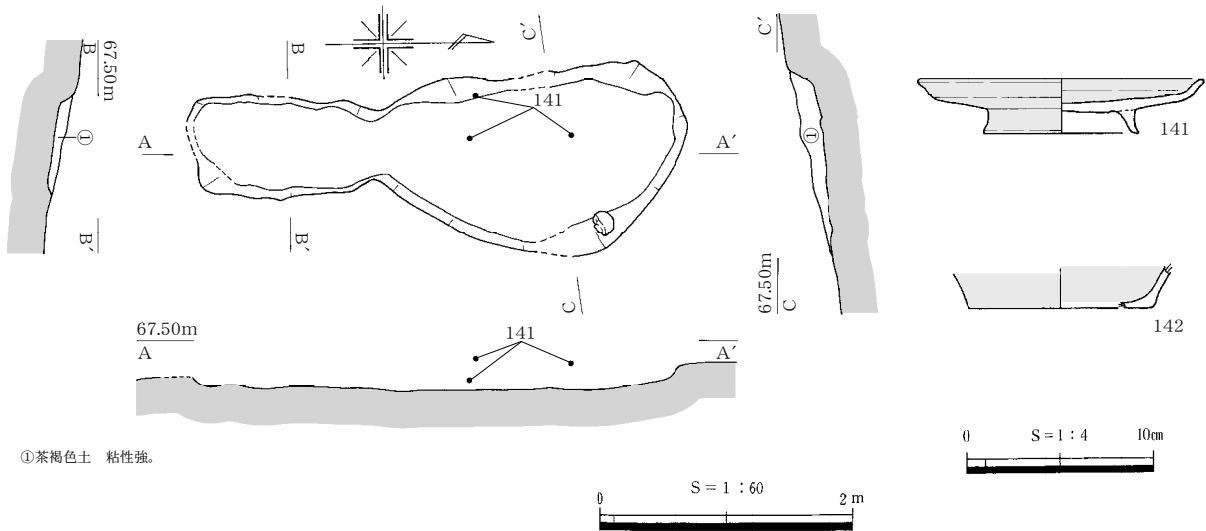
上層で須恵器片143が1点出土している。当遺跡内において溝は本遺構のみであり、付近に関連すると考えられる遺構は検出されていない。遺物は周辺からの流入によるものと考えられ、時期・性格ともに不明である。

(岩井)

焼土 1 (189図)

P16グリッド、標高69mの平坦面に位置する。V層下位精査中に検出した。残存状況は不良である。焼土面は2箇所あり、規模・形態はそれぞれ長軸90・100cm、短軸85・55cmの不整円形、楕円形を呈す。人為的な掘り方は認められない。時期・用途は不明である。

(福井)



第185図 S S 2

第186図 S S 2 出土遺物

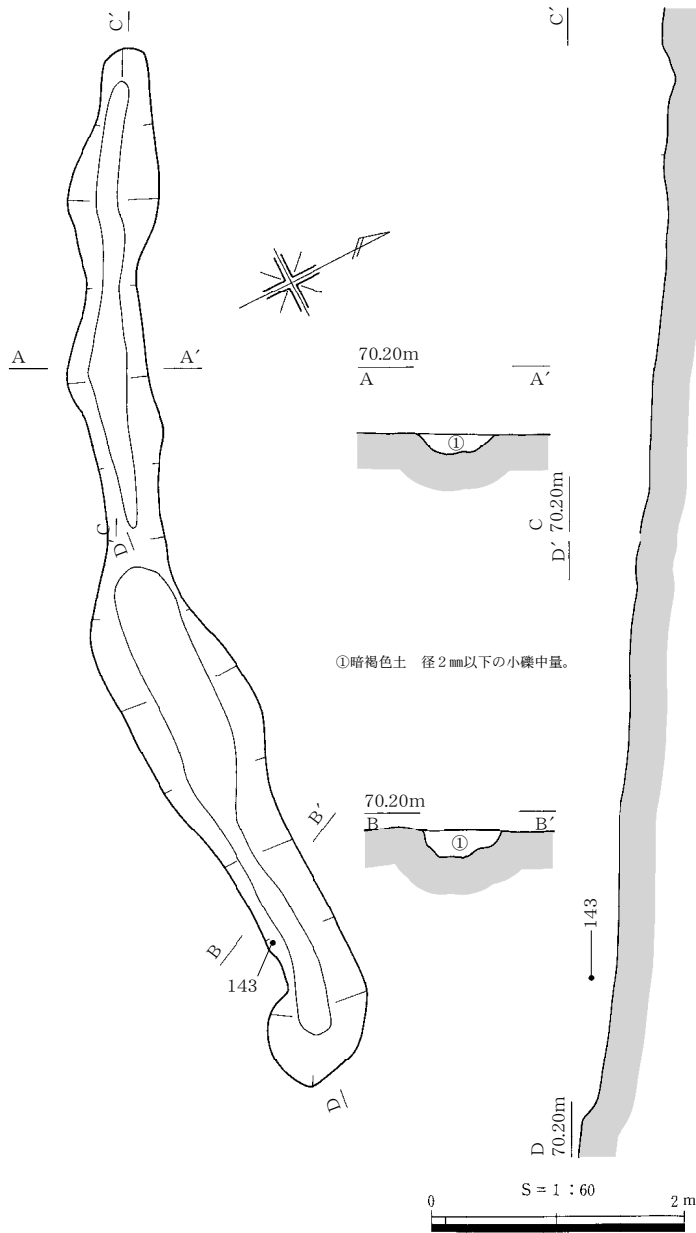
表63 S S 1 出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S52	S S 1	1層	磨石・敲石	安山岩	15.7	5.2	14.3	1530.0	表面磨面、側・下面敲打痕

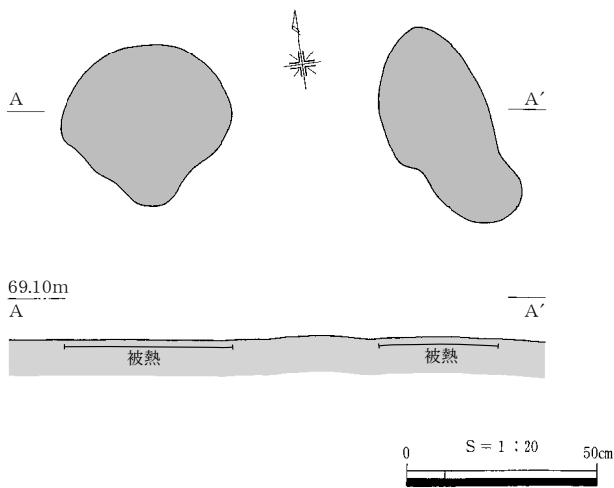
表64 S S 2 出土土器観察表

遺物No.	遺構	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
141	S S 2 埋土	土師器 高台付皿	※15.0 3.0		高台完存 体部1/3	外面：体部回転ナデ、高台貼付後回転ナデ 底部へラ切り後ナデ・指頭調整 内面：体部・高台部回転ナデ	密 1.5mm以下の石英、白色砂粒、マンガ、雲母等	外面：浅黄橙~明赤褐色 内面：浅黄橙~明赤褐色	良好	体部内面・高台内面端部赤色塗彩、胎土分析試料No.7
142	S S 2 埋土	土師器 坏	底径※9.8 △2.0		1/4以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩、摩滅顕著、胎土分析試料No.9

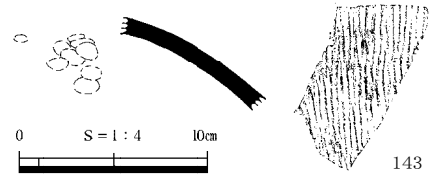




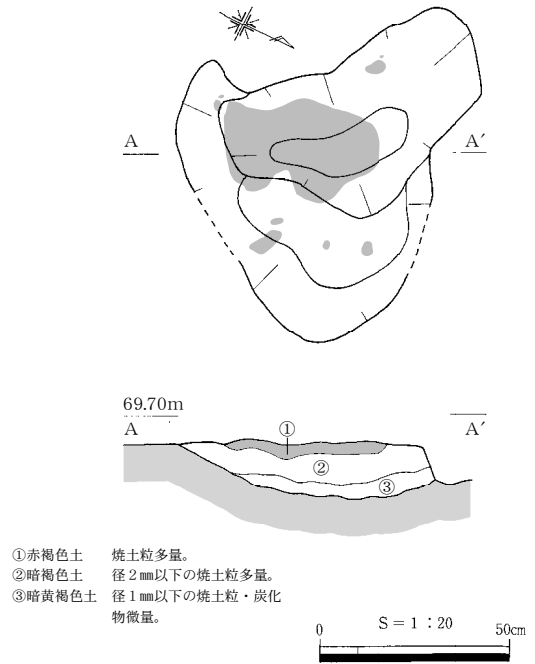
第187図 SD 1



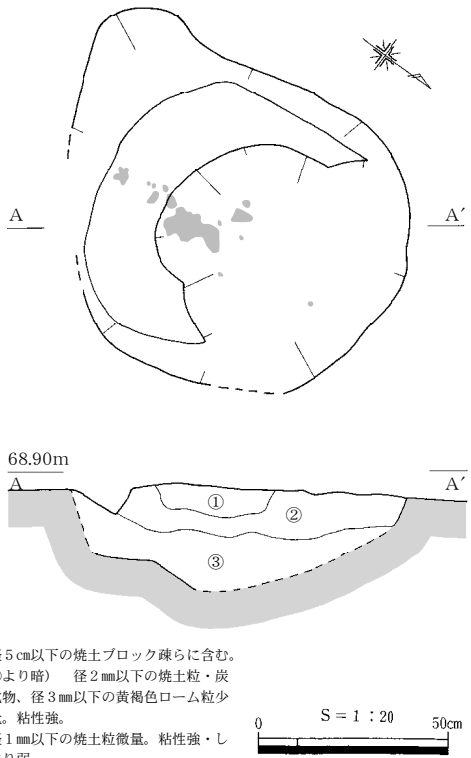
第189図 焼土 1



第188図 SD 1 出土遺物



第190図 焼土 2



第191図 焼土 3

表65 S D 1 出土土器観察表

遺物No.	遺構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
143	S D 1 埋土	須恵器 甕	— △4.9	肩部1/10 以下	外面：平行タタキ 内面：ユビオサエ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：灰褐～にぶい橙色 内面：にぶい橙色	不良	

焼土 2 (第190図、PL.26)

N 8 グリッド、標高69.5mの緩斜面に位置する。平面形は90×80cmの不整形を呈し、深さは16cmを測る。浅い皿状の掘り込み底面および壁面に被熱痕跡は認められない。中には焼土粒を含む暗褐色土が堆積しており、中心部上面に42×28cmの歪な楕円形を呈する焼土が形成されていた。焼土はソフトローム層が被熱によって赤変したものと推測され、採取したサンプルの水洗選別を行ったが鍛造剥片や粒状滓は含まれておらず、鍛冶関連遺構ではない。時期・性格とも不明である。(高尾)

焼土 3 (第191図)

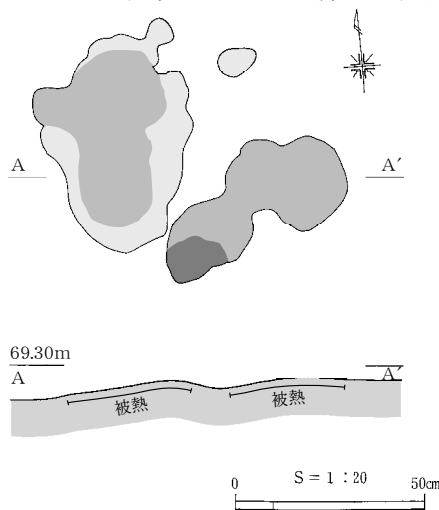
L 8 グリッド、標高68.8mの丘陵平坦面に位置する。平面形は長軸1.04m、短軸0.92mの歪な円形を呈す。底面を掘りすぎたため正確な深さは不明である。底面に被熱痕跡はない。埋土はすべて焼土粒を含み、①層には5cm大の焼土塊が目立つ。埋土のサンプルを採取して水洗選別を行ったが鍛冶関連遺物は含まれていなかった。時期・性格とも不明である。(高尾)

焼土 4 (第192図)

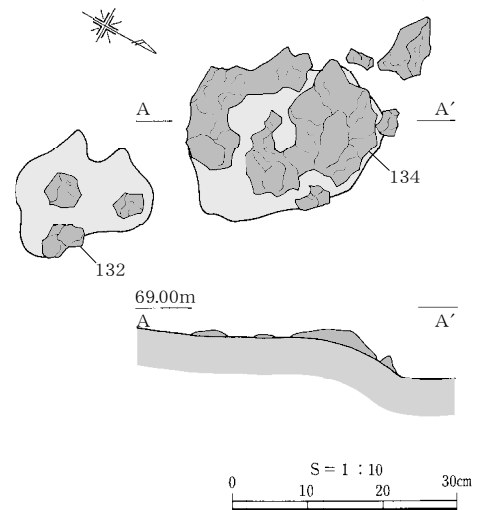
P 9 グリッド、東山南西部、標高約69.2mの台地平坦面に位置する。平面形態は、長軸0.53m、短軸0.42mの楕円形を呈した焼土面と長軸0.54m、短軸0.30mの瓢形をした焼土面の2ヶ所が確認された。時期・性格とも不明である。(小口)

被熱粘土塊 1 (第193図、PL.26)

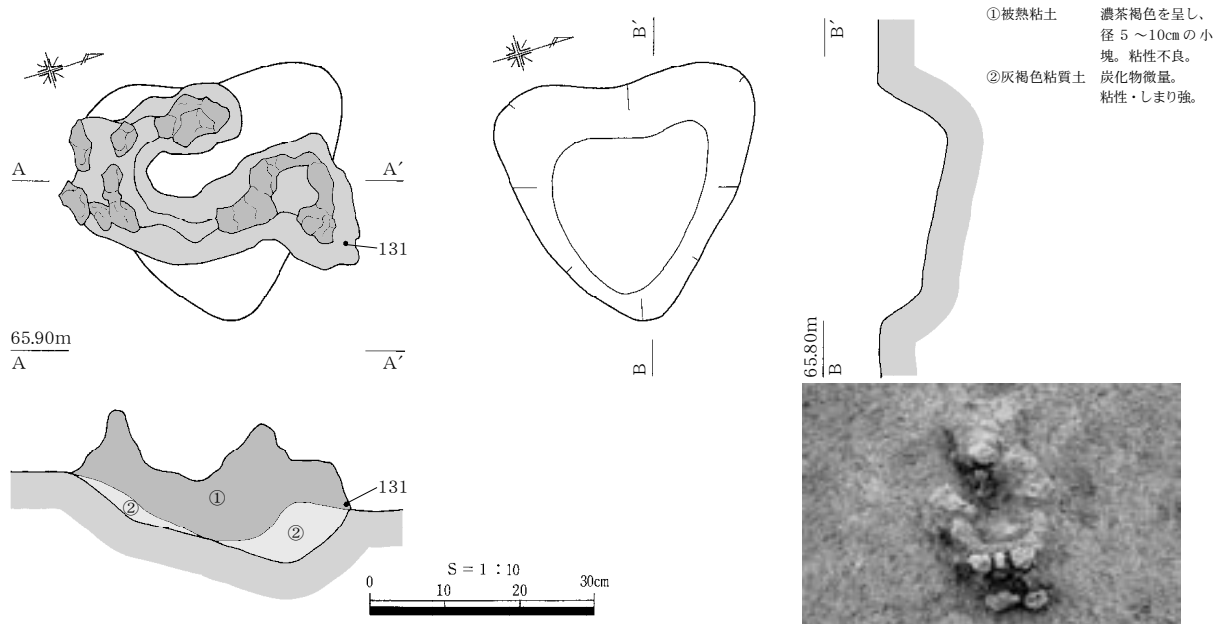
R 10 グリッド、東山南西部の谷部寄り、標高約68.9mの緩斜面に位置する。南東方向約8mにはS B 6・7が、南約1.2mには製錬滓F 35・含鉄鉄滓F 36が出土したP 422が所在している。被熱粘土塊は、第II層暗褐色土掘り下げ中に長軸28cm、短軸21cmのブロック状に検出された。残存状態は脆弱で、取り上げの際径5cmほどの塊に崩れてしまうほどであった。粘土塊下部には、掘り込みなどのプランは確認されず、炉などの構築物が人為的に廃棄されたものと考えられる。この中から3点110～112を図化している(第179図)。(小口)



第192図 焼土 4



第193図 被熱粘土塊 1



第194図 被熱粘土塊 2 写真10 被熱粘土塊 2 検出状況

## 被熱粘土塊 2 (第194図、写真10)

R 12グリッド、標高約65.7mに位置する。谷部のⅢ層を掘り下げている段階で検出された。平面形態は、長軸0.38m、短軸0.20mの北側に開口部を有したU字状を呈している。検出面から粘土塊底面までの高さは0.15m、粘土塊下部の三角状の掘り方底面までは0.20mを測る。被熱粘土塊は濃茶褐色を呈し、残存状況は脆弱であった。粘土塊下部には、粘性に富む灰褐色粘質土が堆積していた。本遺構の性格については不明であるが、ここから約4m北の同じく谷底面には焼土が廃棄された状況が確認されたことから、炉などの機能を有していたものと推定される。本遺構の中から1点109を図化している(第179図)。(小口)

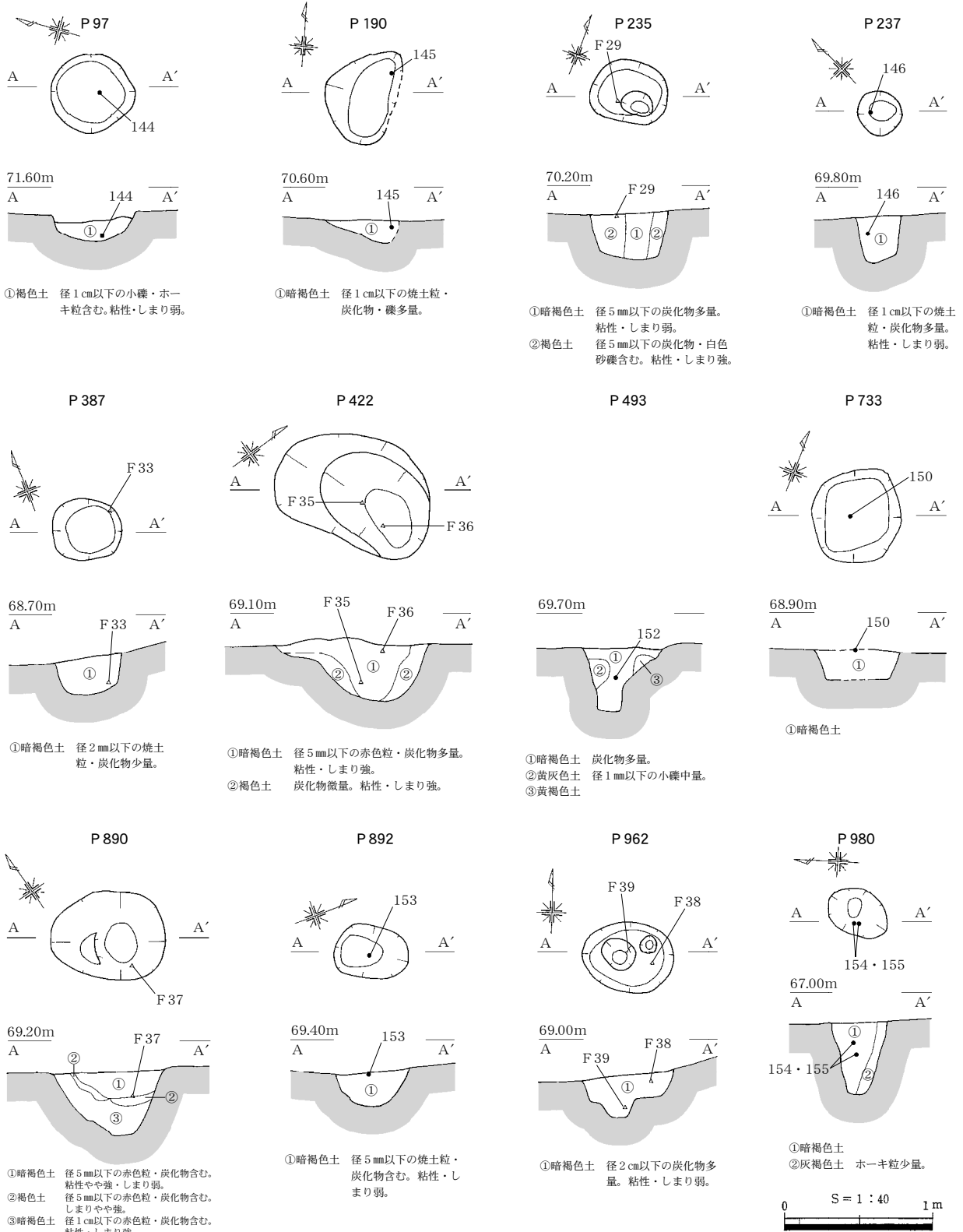
## ピット (第172・195～197図、表66・67、写真12、PL.21)

**概要** ピットは当遺跡内で989基検出し、その中の60基余は掘立柱建物跡を構成するピットとして認定された。その分布の特色として、東山に多く拡がりを見せることである。とくに南半部に位置するピットの多くがⅡ層暗褐色土系の埋土で、9世紀代に構築・廃絶されたものと考えられる。一方、北半部のピットは、褐色土系が目立ち竪穴住居跡埋土と近似していることなどから弥生時代中期から後期に構築・廃絶されたものと推定される。ただし、その主体は遺物が出土せず、明確な帰属時期や性格が不明であることから、ここでは図化可能な遺物が出土したピットのみ取り上げたい。(小口)

**P 97** U 9グリッド、規模は長軸0.53m、短軸0.5m、深さは最大0.18mを測る。埋土は褐色土単層である。弥生土器壺144が底面付近で出土したが、流れ込みとみられる。清水編年V-1様式に比定されることから、本遺構は弥生時代後期以降に埋没したものと考えられる。(岩井)

**P 190** T 9グリッド、規模は長軸0.97m、短軸0.6m、深さは最大0.15mを測る。埋土は単層で暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物粒が混入する。遺物は、土師器甕145が埋土中から出土している。埋土は自然堆積と考えられ、遺物は流れ込みと考えられる。(岩井)

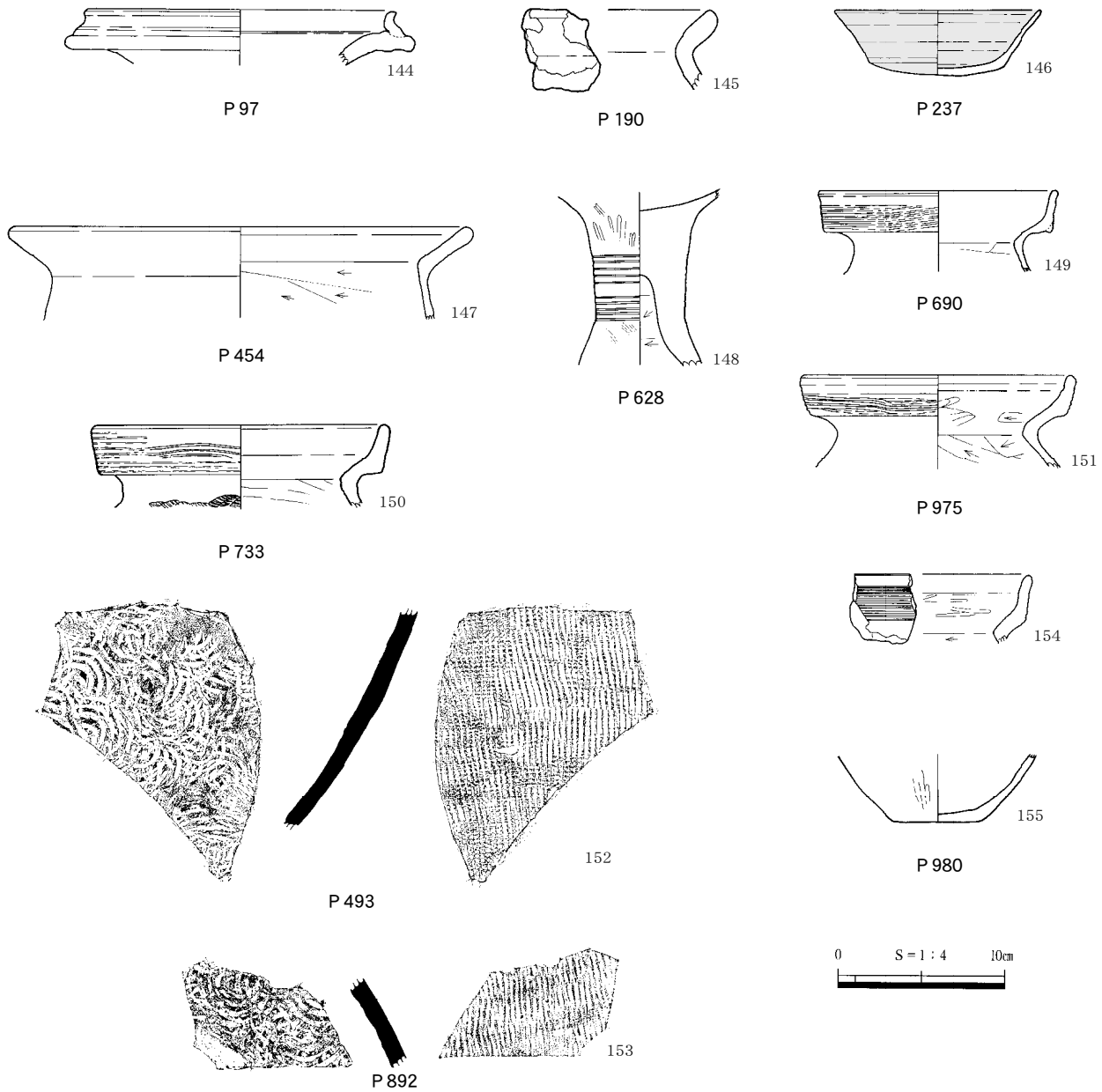
**P 235** T 9グリッド、規模は長軸0.52m、短軸0.42m、深さは最大0.31mを測る。埋土は幅0.18mの暗褐色土が堆積し、底面には柱当たりと想定される浅い窪みが確認された。埋土上部から、椀形



鍛冶滓F 29が出土している。埋土の特徴から、9世紀代に廃絶されたものであろう。 (小口)

P 237 T10グリッド、規模は径0.3m、深さは最大0.32mを測る。埋土は炭化物などを含んだ暗褐色土を主体とする。遺物は内外面赤色塗彩された土師器杯146で、埋没段階の流れ込みによるものと考えられる。時期は遺物から、9世紀後半、伯耆国庁編年第2段階と考えられる。 (岩井)

P 387 S11グリッド、規模は長軸0.47m、短軸0.40m、深さは最大0.25mを測る。埋土下部から



第196図 ピット内出土遺物（1）

表66 ピット出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
144	P 97 埋土	弥生土器 壺	※18.6 △3.3	口縁部1/4 以下	外面：口縁部2条の凹線、頸部ナデ 内面：口縁部ユビナデ、頸部ココナデ	密 2mm以下の白色砂粒多量	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
145	P 190 埋土	土師器 甕	— △4.8	口縁部 1/10以下	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	摩滅顕著
146	P 237 埋土	土師器 坏	12.4 3.9	ほぼ完存	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ、底部押圧	密 2mm以下の白色砂粒	外面：明褐色 内面：明褐色	良好	内外面赤色塗彩、胎土分析試料No.3
147	P 454 埋土	土師器 甕	※27.4 △5.6	口縁部1/4 以下	外面：口縁部ココナデ、頸～胴部ナデ 内面：口縁部ココナデ、頸～胴部ケズリ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
148	P 628 埋土	弥生土器 高坏	— △10.2	脚柱部ほぼ 完存	外面：ナデ後ミガキ、5条1単位の平行多条沈線を2段施文 内面：坏部ナデ、脚部ヘラケズリ	密 5mm以下石英多量	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
149	P 690 埋土	弥生土器 甕	※14.4 △4.8	口縁部1/4 以下	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部ヘラケズリ	密 2mm以下の砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	摩滅顕著
150	P 733 検出面	弥生土器 甕	※17.4 △5.0	口縁部1/4	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、頸部具殼腹縁による押引文 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好	
151	P 975 埋土	弥生土器 甕	— △4.2	口縁部 1/10以下	外面：ハケ状工具による多条平行沈線 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部ケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：橙色	良好	
152	P 493 埋土	須恵器 大甕	— △12.7	胴部1/4 以下	外面：格子タタキ 内面：同心円状当具痕	緻密 1mm以下の白色砂粒・ 石英	外面：暗灰色 内面：灰色	良好	胎土分析試料No.11
153	P 892 暗褐色土	須恵器 甕	— △5.4	胴部1/10 以下	外面：平行タタキ 内面：同心円状当具痕	密 1mm以下の白色砂粒	外面：オリーブ灰色 内面：灰色	良好	
154	P 980 埋土	弥生土器 甕	※16.2 △5.6	口縁部1/4 以下	外面：口縁部多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部ヘラケズリ	密 1mm以下の砂粒多量	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	
155	P 980 埋土	弥生土器 甕	底径※5.4 △4.1	底部完存	外面：胴部ナデ後ミガキ、底部ミガキ 内面：摩滅により調整不明	密 白色砂粒多量	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面煤付着

鍛冶滓F33が出土している。埋土の特徴から9世紀代に構築・廃絶されたものと考えられる。(小口)

P422 R10グリッド、規模は長軸1.1m、短軸0.72m、深さは最大で0.40mを測る。埋土は①層暗褐色土と②層褐色土から構成され、①層中から流動滓F35と含鉄滓F36が出土している。いずれも分析の結果、製錬滓であることが明らかとなっている(NMH-5・6)。埋土や出土遺物から9世紀代に構築・廃絶されたものと考えられる。(小口)

P493 O9グリッド、規模は長軸0.53m、深さは最大0.43mを測る。埋土は3層に分層できた。出土遺物は須恵器片152で、明確な時期は不明である。(岩井)

P733 K8グリッド、規模は長軸0.63m、短軸0.6m、深さは最大0.2mを測る。埋土は暗褐色土単層である。出土遺物は弥生土器甕150で、検出面で出土した。清水編年V-3様式に比定され、弥生時代後期後葉期に属するが、流入によるものと考えられる。(岩井)

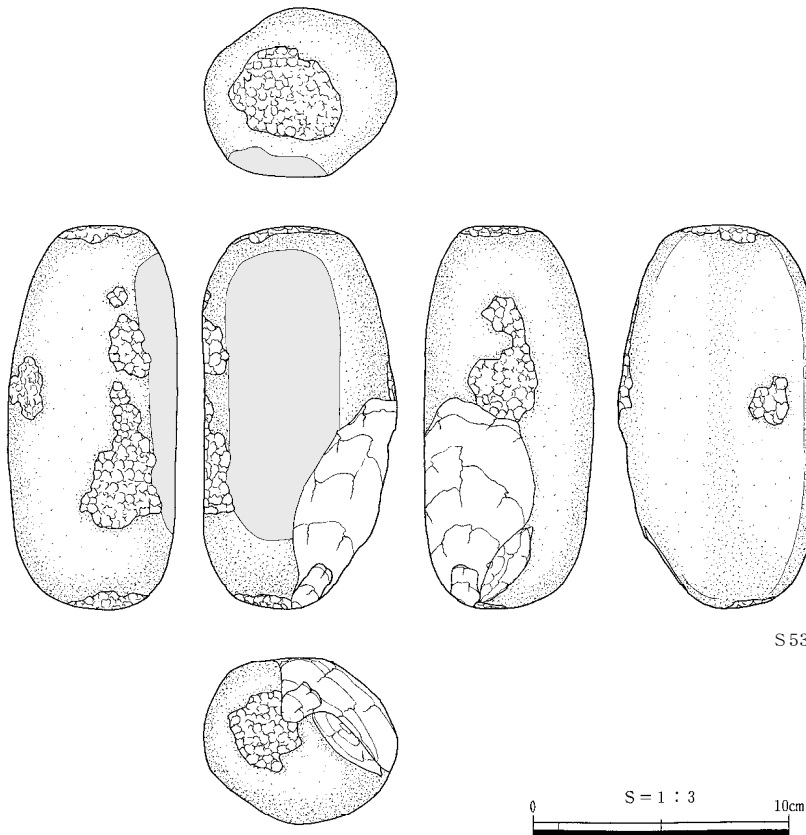
P890 S10グリッド、SB6の西側約1.8mに位置する。規模は長軸0.77m、短軸0.6m、深さは最大で0.43mを測る。埋土は3層に分層でき、②層上面から鉄塊系遺物F37が出土している。埋土の特徴と出土遺物から9世紀代に廃絶されたものと考えられる。(小口)

P892 S10グリッド、規模は長軸0.5m、短軸0.35m、深さは最大0.27mを測る。埋土は暗褐色土単層で、焼土・炭化物粒が混入する。出土遺物は須恵器片153であるが、小片であるため明確な時期は不明である。(岩井)

P962 S10・11グリッド、SB6の西側約2.5mに位置する。長軸0.62m、短軸4.2m、深さは最大で0.28mを測る。断面は底面に

2基の小ピットを有していることから段状を呈する。埋土は暗褐色土単層であり、埋土中から鍛冶滓F38・39が出土している。埋土の特徴と出土遺物から9世紀代に廃絶されたものであろう。(小口)

P980 L9グリッド、規模は長軸0.43m、短軸0.3m、深さは最大0.54mを測る。埋土は褐色土を主体とし、2層に分層できた。遺物は、弥生土器の甕口縁部154と底部155が出土した。清水編年V-3様式に比定され、弥生時代後期後葉期に属するが、流入によるものと考えられる。(岩井)



第197図 ピット内出土遺物(2)

表67 ピット出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S53	P368	埋土	磨石・敲石	黒雲母角閃石安山岩	15.2	6.7	7.7	1120.0	表面磨面、裏・側・上下面敲打痕、側面剥離痕

## 第7節 包含層出土遺物

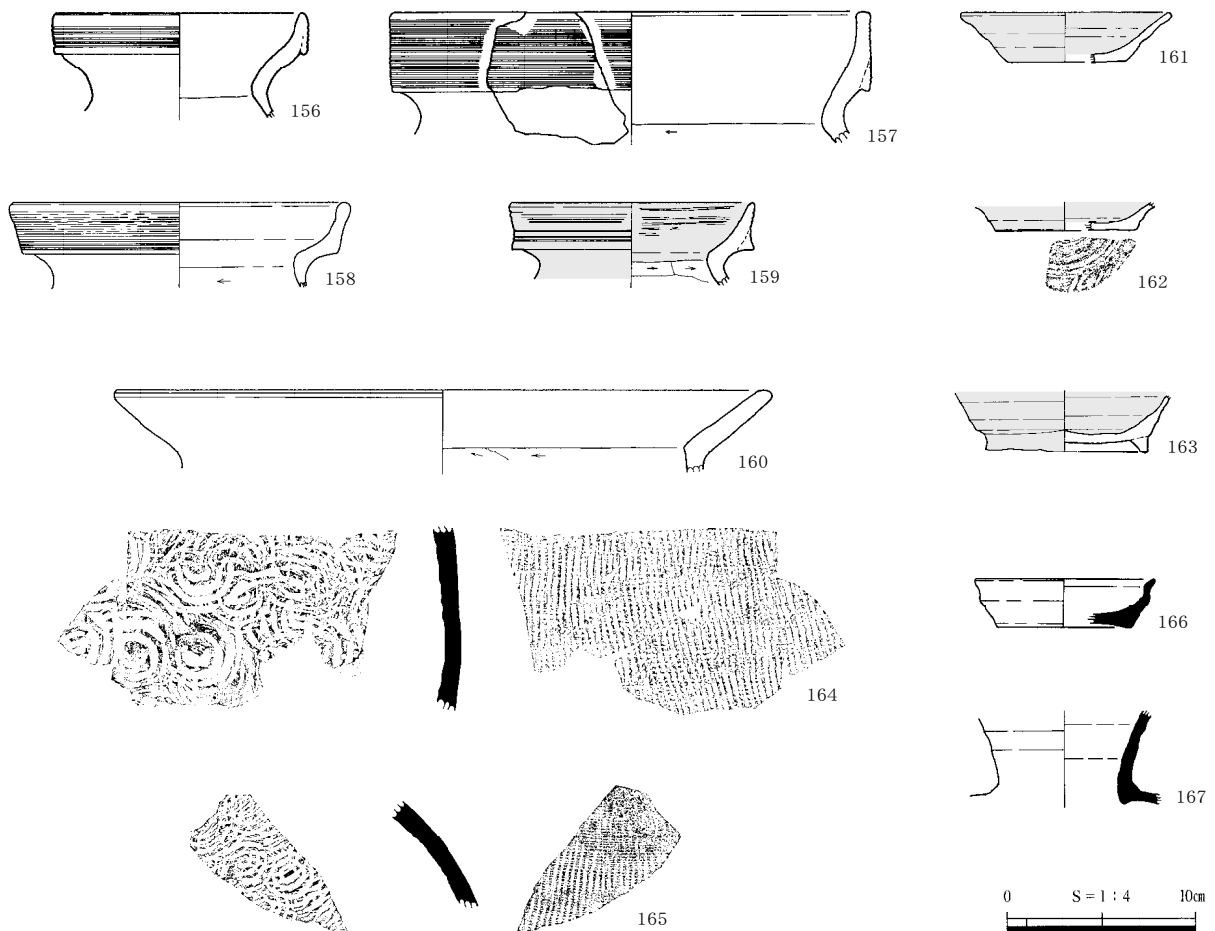
中道東山西山遺跡における基本層序および遺物包含層の詳細については、第3章第2節で述べたとおりである。包含層からの出土遺物は検出された各期の遺構数に比例して多いとはいえない。特に丘陵尾根上に堆積した第IV層褐色土は後世に流失したためか遺存状況が悪く、同層からの出土遺物は希少である。ただ、出土遺物は検出された遺構群の時期に概ね限定され、本遺跡が立地する丘陵の利用期間を示している。

ここでは包含層出土遺物のうち、本章第4節で詳細に解説した製鉄・鍛冶関連遺物を除く土器・石器について、出土層位ごとに概要を述べる。 (高尾)

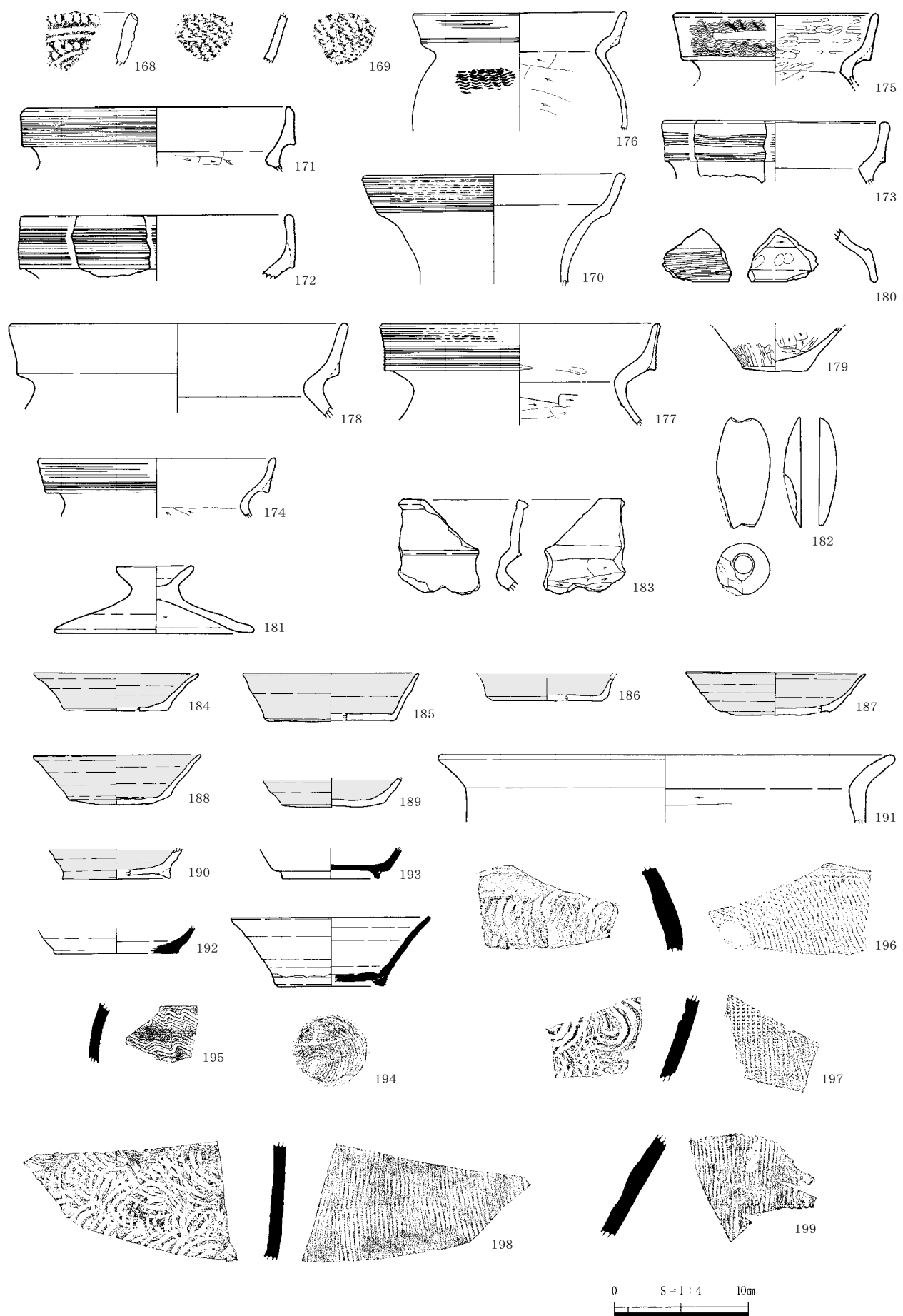
**暗褐色土2 (第198・200図、表68・69、PL.38~41)** 暗褐色土2層では、少量だが弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄滓が出土した。石器には鍛冶具である鉄床石や砥石も含まれる。

156は弥生土器壺、157~159は甕で、直立する複合口縁の下端部が下垂するもの(156・157)と外傾する複合口縁をもち下端部が拡張しない(158)もしくは斜め下方に張り出す(159)ものがある。後者は口縁部外面の多条平行沈線をナデ消している。

160は土師器甕で、胴部から「く」字状に屈曲して外傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。頸部内面の稜は鋭く、外面括れよりも上部に位置する。161~163は土師器坏で、内外面を赤色塗彩する。161・162の底部外面はヘラ切り後未調整である。163は短い高台が付くもので、回転ナデによって仕上げられている。底部から直線的に立ち上がる坏の口縁端部はすべて打ち欠かれている。



第198図 包含層出土遺物(1)



第199図 包含層出土遺物（2）



164は須恵器甕胴部、165は外面上半に平行タタキ後カキメを施す甕肩部と考えられる。166は小型の須恵器坏で、内湾気味に立ち上がる口縁端部は外方に短く屈曲する。167は長頸壺で、頸部は外傾しながら立ち上がり、肩部は張る。

石器にはスクレイパー S 62・63があり、石材はどちらも無斑晶安山岩である。 (高尾)

**暗褐色土・その他 (第199～202図、表68～70、PL.38～41)** 暗褐色土からは、縄文～平安時代の土器・土製品、石器、鉄製品・鉄滓など様々な遺物が出土した。特に土師器・須恵器の多くは形態的特徴から伯耆国庁編年第2段階 S D 37～S K 05様式に比定され、谷部を挟む東西尾根傾斜変換点付近で営まれた鍛冶関連遺構から鉄滓などととも廃棄されたものと考えられる。

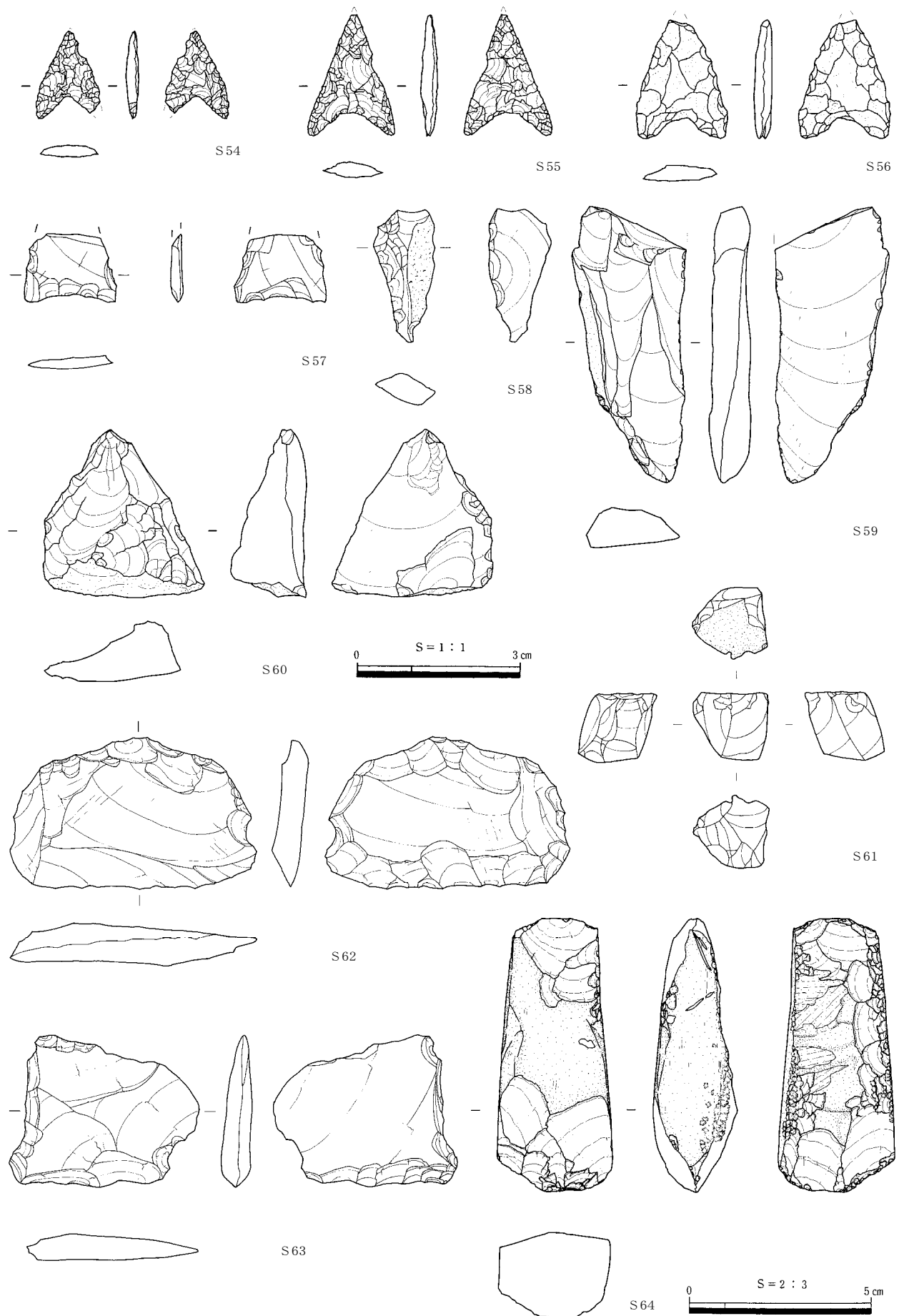
168・169は縄文土器深鉢である。168は口縁端部を刻み、外面の沈線区画内に刺突文が施される。169は内外面とも斜方向に R L 縄文を施す。

170～181は弥生土器で、このうち173・177・180が出土層位不明、176・179が褐色土から出土している。壺170は口縁部と頸部の境が明瞭でなく、下端部も突出しない。171～178は甕で、直立する複合口縁の端部がやや内湾気味となる171・172と、外傾して立ち上がる複合口縁の下端部が斜め下方へ突出する173～175・177・178、下端が突出しない176が見られる。外傾して立ち上がる複合口縁をもつもののうち、178は外面ナデのみであるが、それ以外はすべて口縁部外面の多条平行沈線文をナデ消している。179は底部で、器壁は全体的に薄く、底面は胴部との境が不明瞭で丸底化しつつある。180は脚台裾部で、内面に指頭圧痕が認められる。181は蓋で、「ハ」字状に開く低脚状のつまみが付く。182は大型の管状土錘で、暗褐色土から出土したが時期不明である。

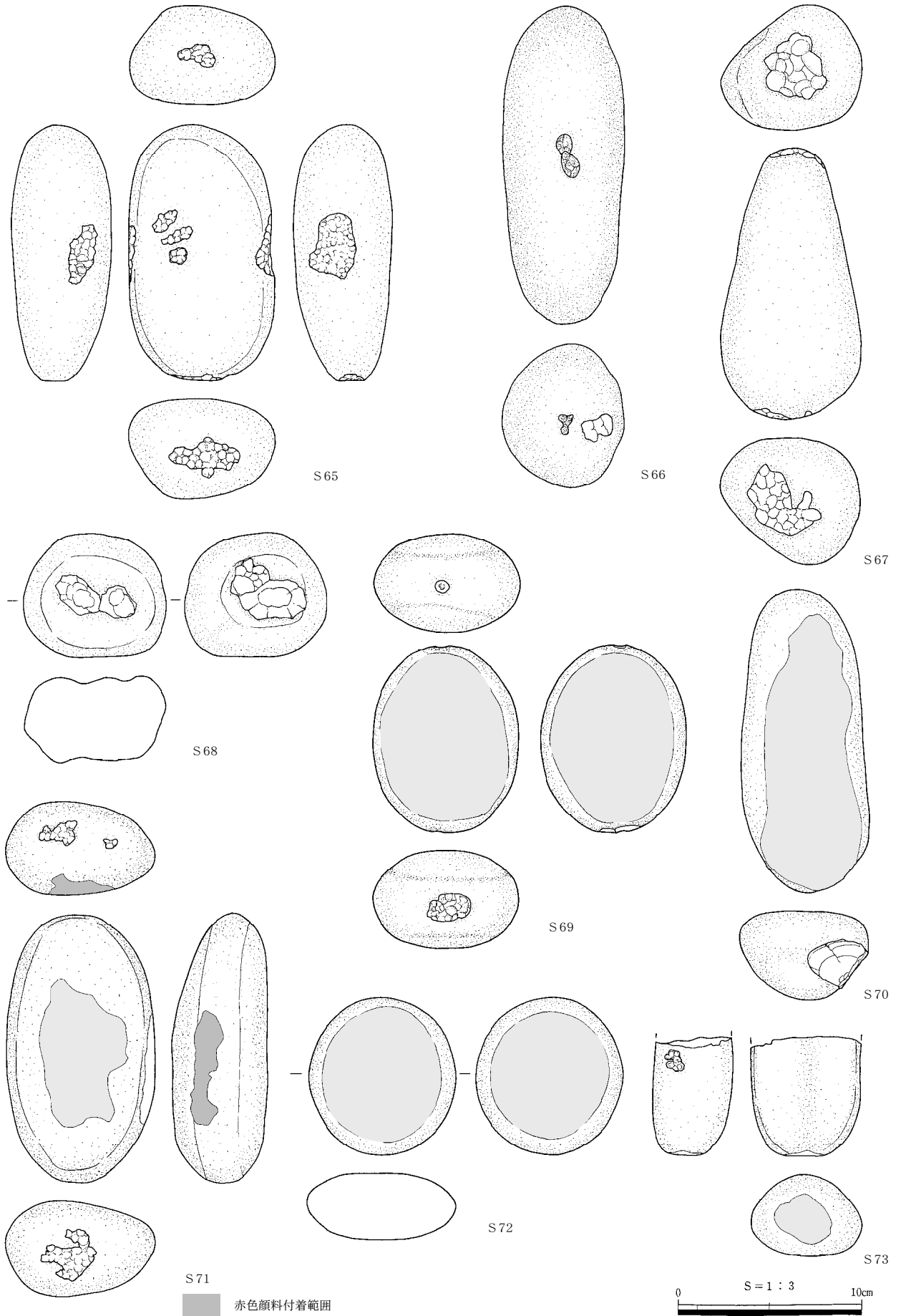
183～191は土師器である。183は複合口縁を呈する甕で、口縁端部は肥厚し、外方へつまみ出す。191も甕で、直立する胴部から「く」字状に外傾して立ち上がる口縁部をもつ。184～190は内外面を赤色塗彩する坏・高台付坏で、底部から外傾して直線的に立ち上がる口縁部をもつ。体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデによって仕上げられるが、185と188には底部内面から指により押圧を加える、いわゆる「底部押圧技法」が認められる。190は高台付坏で、短く「ハ」字状に開く高台が付く底部は回転ナデによって仕上げられる。

192～199は須恵器である。192は底部外面に回転糸切り痕を残す坏である。193・194は高台付坏で、193が底部外縁からやや内側に断面梯形の高台を付し、全体を回転ナデによって仕上げるのに対し、194は断面梯形の高台を回転ナデによって底部外縁に張り出し気味に付すものの、底面には回転糸切り痕を残す。195は壺の頸部で、外面に2段の波状文が認められる。196～199は甕胴部で、外面に平行あるいは格子タタキ目が見られ、内面に同心円状の当て具痕を残す。196は胴部上半で内外面の一部をヨコナデし、底部に近い部分の破片199の内面はナデ・ユビオサエによって仕上げられている。 (高尾)

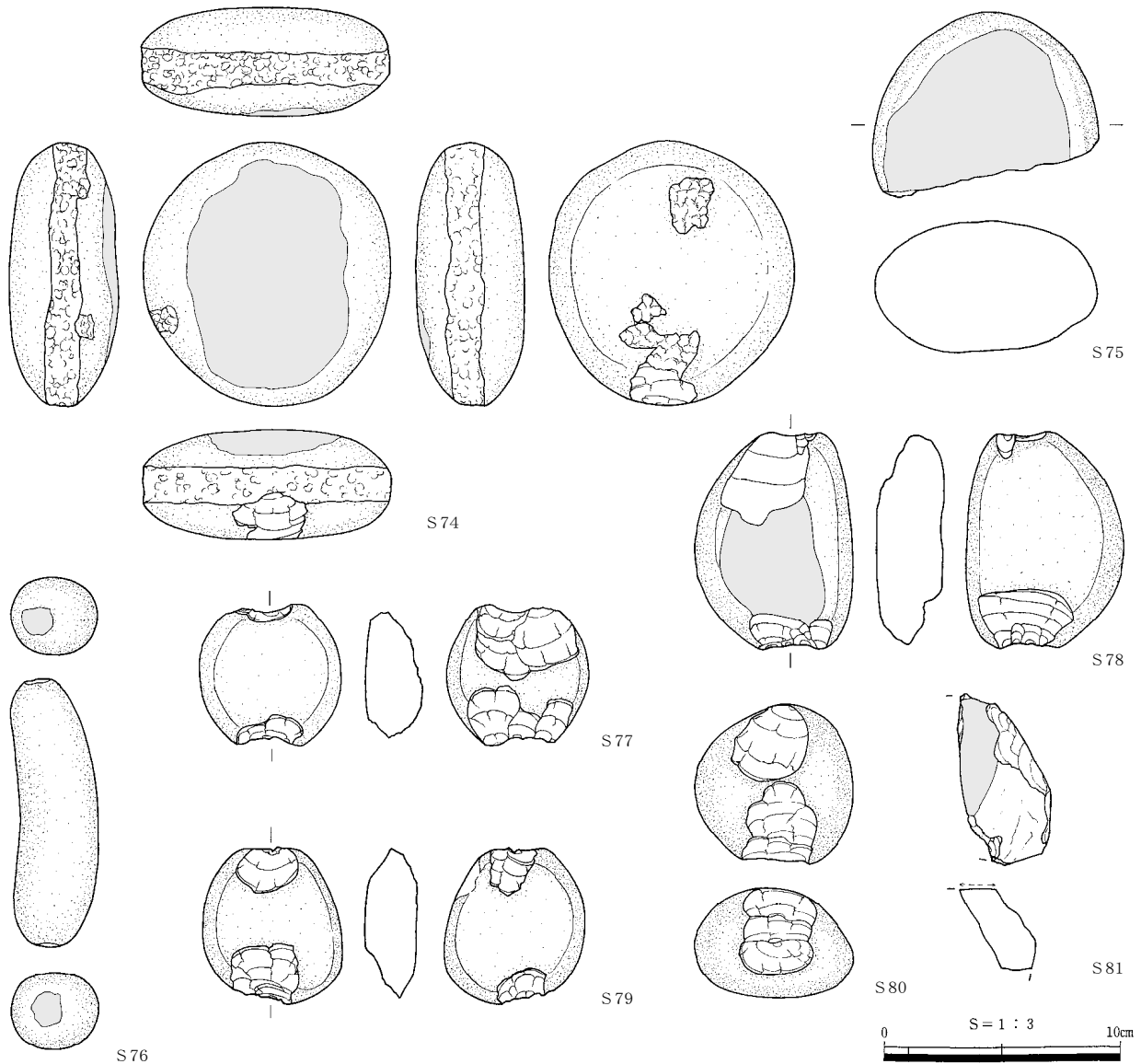
S 54～57は石鏃である。いずれも凹基無茎鏃であり、S 57は先端部が欠損している。石材は S 54・55が黒曜石、S 56・57が無斑晶安山岩である。S 58は黒曜石製の石錐である。左側辺に調整加工が施され、右側辺部は礫面を残していることから未製品の可能性も残る。S 59・60はそれぞれ黒曜石・チャート製の剥片である。S 61はサイコロ形をした黒曜石製石核であり、打面に礫面が残っている。S 62・63は無斑晶安山岩製のスクレイパーであり、連続的な調整剥離によって刃部を作出している。S 64は無斑晶安山岩製の磨製石斧であり、側辺が直線的に仕上げられ、撥形を呈する。



第200 包含層出土遺物 (3)



第201図 包含層出土遺物（4）



第202図 包含層出土遺物（5）

刃部と基部は剥離面があり、側辺にも敲打痕が観察されることから、敲石に転用されたものと思われる。S65～70は安山岩製の磨石・敲石である。S65は楕円形を呈し、表面・側面の敲打部が認められる。S66は楕円形を呈し、表面と下部側辺に敲打部がある。S67は下部に最大幅を有する砲弾形をした敲石であり、上下側辺に敲打部を有している。S68は表裏面に凹みを持ち、側辺に敲打部がみられる凹石である。S69・70は、表裏面に摩耗面と下部側辺部に敲打痕を持つ磨石・敲石である。表裏面に摩耗面が、上下側辺に敲打部が観察される。S71は下部側辺に敲打部を有し、表面と右側辺部に赤色顔料が付着した磨石・敲石である。石材はデイサイトである。S72・73は円盤状の磨石であり、前者は表裏面に摩耗面がみられ、後者は下部に敲打部を持ち、上部が折損している。S74・75は円盤状の磨石・敲石であり、表面には摩耗面を有している。特にS74は側辺部に敲打痕がめぐっている。S76は弓なり状の磨石であり、上下端部に摩耗面が観察される。S77～80は礫石錘であり、上下に打ち欠きがみられる。石材は、S77・78は安山岩、S79は紫蘇輝石角閃石安山岩、S80は角閃石安山岩である。S81は細粒花崗岩製の砥石であり、砥面が1面確認できる。 (小口)

表68 包含層出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
156	S-12 暗褐色土2	弥生土器 壺	※12.8 △5.5	口縁部1/6	外面：口縁部5条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	密 3mm以下の白色砂粒	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	良好	内外面風化著しい
157	R-11 暗褐色土2	弥生土器 壺	※25.0 △7.4	口縁部1/8	外面：口縁部は15条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 3mm以下の白色・灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	
158	Q-11 暗褐色土2	弥生土器 壺	※17.6 △4.5	口縁部1/4 以下	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密 2mm以下の石英多量	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
159	Q-11 暗褐色土2	弥生土器 壺	※12.6 △4.3	口縁部1/4	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部以下ヘラケズリ	密 1mmほどの白色砂粒、輝石	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	内外面赤色塗彩
160	R-11 暗褐色土2	土師器 壺	※33.6 △4.3	口縁部1/8	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	緻密 1mm以下の砂粒	外面：明褐色 内面：にぶい褐色	良好	外面煤付着
161	R-12 暗褐色土2	土師器 環	※11.1 △2.6	1/4以下	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ	密 2mm以下の砂粒	外面：浅黄褐色 内面：褐色	良好	内外面赤色塗彩、 摩滅顕著
162	Q-12 暗褐色土2	土師器 環	底径※7.4 △1.5	底部1/4	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒	外面：橙～にぶい黄褐色 内面：褐色	良好	内外面赤色塗彩
163	R-12 暗褐色土2	土師器 高台付環	底径8.6 △3.1	2/3	外面：体部～高台部回転ナデ、底部回転ナデ 内面：体部・高台部回転ナデ	密 1mm以下の白色砂礫	外面：明褐色 内面：明褐色	良好	内外面赤色塗彩、 胎土分析試料No.6
164	Q-12 暗褐色土2	須恵器 壺	△9.7	胴部1/10 以下	外面：格子タタキ 内面：同心円状当具痕	密 1mm以下の砂粒	外面：灰色 内面：灰色	不良	
165	Q-12 暗褐色土2	須恵器 壺	△5.6	肩部1/10 以下	外面：平行タタキ後カキメ 内面：同心円状当具痕	密 1mm以下の砂粒	外面：灰色 内面：灰色	不良	
166	Q-10 暗褐色土2	須恵器 環	※9.6 △2.6	1/4以下	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り・ナデ 内面：回転ナデ	精製 5mm以下の長石少量	外面：灰色 内面：灰色	良好	
167	Q-12 暗褐色土2	須恵器 壺	△5.0	頸～肩部 1/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄～灰色 内面：にぶい黄～灰色	良好	
168	G-15 暗褐色土2	縄文土器 深鉢	△3.8	口縁部1/8 以下	外面：口縁部に刻み、沈線区画内に刺突文 内面：粗いナデ	密 5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	
169	I-16 暗褐色土2	縄文土器 深鉢	△3.6	胴部1/10 以下	外面：ナデ後、R L縄文 内面：ナデ後、R L縄文	密 3mmほどの白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	繊維混入
170	Q-11 暗褐色土2	弥生土器 壺	※19.6 △8.0	口縁部～頸部 1/4	外面：口縁部多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 2mm程度の砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
171	R-10 暗褐色土2	弥生土器 壺	※19.6 △4.3	口縁部1/4 以下	外面：口縁部11条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 3mm以下石英・白色砂粒・ マンガン・雲母	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	口縁部下端外面に煤付着、 部分的に塗彩痕
172	Q-5 暗褐色土2	弥生土器 壺	※20.2 △4.8	口縁部1/4 以下	外面：口縁部11条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：ヨコナデ	密 3mmほどの白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
173	M-7 不明	弥生土器 不明	※17.0 △4.6	口縁部1/8 以下	外面：口縁部11条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 1～2mmの白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：褐色	良好	
174	O-8 暗褐色土2	弥生土器 壺	※17.0 △4.2	口縁部1/4 以下	外面：口縁部、9～10条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部～頸部上半ヨコナデ、頸部下半以下ヘラケズリ	密 3mm以下の白色・灰色砂粒	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	良好	外面炭化物付着
175	Q-10 暗褐色土2	弥生土器 壺	※14.8 △4.9	口縁部1/4 以下	外面：口縁部15条の波状文後一部ナデ消し、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、頸部以下ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒、石 英、マンガン、雲母等	外面：浅黄褐色 内面：淡黄色	良好	口縁部下端外面 煤付着
176	I-7 褐色土	弥生土器 壺	※15.2 △8.8	1/6	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、肩部波状文後上下をナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 3mm以下の白色・灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	口縁部煤付着
177	- 表採	弥生土器 壺	※20.6 △7.6	口縁部1/4	外面：口縁部10条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部ヘラケズリ	粗 5mm以下の石英多量、2 mm以下の長石少量	外面：褐色 内面：褐色	良好	摩滅顕著
178	T-11 暗褐色土2	弥生土器 壺	※25.0 △6.4	口縁部1/4	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密 3mm以下の石英少量、2 mm以下の長石少量	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
179	J-6 褐色土	弥生土器 底部	4.7 △3.2	底部完存	外面：胴部～底部ナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密 3mmほどの白色砂粒、石 英、マンガン等	外面：橙～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面煤付着、黒 斑あり
180	J-10 -	弥生土器 脚部	△4.0	脚部1/10 以下	外面：ナデ、裾部貝殻腹線による多条平行沈線 内面：脚部ヘラケズリ・ユビオサエ、裾部ナデ	密 1.0～2.0mmの白色砂粒、 0.5mm以下の黒色砂粒	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい褐色	良好	
181	Q-10 暗褐色土2	弥生土器 蓋	14.5 5.0	1/3	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ後ヨコナデ	径2mm以下の白色砂粒を多く 含む	外面：褐色 内面：褐色	良好	
182	R-12 暗褐色土2	土師器 壺	長8.3 幅4.0	ほぼ完存	外面：粗いナデ、部分的に欠損 内面：-	密 1～2mmの白色砂礫	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	重さ76.5g
183	T-11 暗褐色土2	土師器 壺	△6.7	口縁部 1/10以下	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 1mm以下の白色砂粒、マ ンガン、雲母等	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
184	S-10 暗褐色土2	土師器 環	※12.3 2.8	1/4	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	良好	内外面赤色塗彩
185	S-11 暗褐色土2	土師器 環	※13.2 △3.6	体部1/6	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後指頭調整・ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ユビオサエ	密 5mm以下の石英、白色砂 粒、マンガン等	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩、 胎土分析試料No.8
186	O-13 暗褐色土2	土師器 環	底径※8.2 △1.6	1/5以下	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の白色砂粒、マ ンガン、雲母等	外面：褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩
187	R-11 暗褐色土2	土師器 環	※13.2 △2.4	体部1/8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の石英、長石、 マンガン等	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩、 胎土分析試料No.10
188	T-9 黒褐色土	土師器 環	※12.4 △3.7	1/3	外面：口縁～体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、底面周縁部押圧 内面：回転ナデ	緻密 1mm以下の砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	内外面部分的に 赤色塗彩残存
189	S-9 暗褐色土2	土師器 環	底径※7.6 △2.1	1/4以下	外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切り後粗いナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の角閃石多量	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	摩滅顕著
190	S-10 暗褐色土2	土師器 高台付環	底径※8.0 △2.2	1/5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
191	R-12 褐色土	土師器 壺	※35.6 △5.5	口縁部1/6	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 1mm以下の砂粒	外面：にぶい褐色 内面：褐色	良好	
192	R-11 暗褐色土2	須恵器 環	底径※9.0 △1.9	底部1/4	外面：体部回転ナデ？、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	精製密 1mm以下の長石やや 多量	外面：灰色 内面：灰色	良好	胎土分析試料No.16
193	S-8 暗褐色土2	須恵器 高台付環	底径※7.2 △2.3	1/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	精製密	外面：灰色 内面：灰色	良好	胎土分析試料No.20
194	Q-12 暗褐色土2	須恵器 高台付環	※14.8 △5.2	1/4以下	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後高台を回転ナデにより貼付 内面：回転ナデ	密 2mm以下の石英、白色砂 粒、マンガン	外面：灰色 内面：灰色～にぶい黄色	やや 不良	胎土分析試料No.17
195	Q-12 暗褐色土2	須恵器 壺	△4.1	頸部1/4 以下	外面：ナデ後波状文2段 内面：ヨコナデ	精製密	外面：灰色 内面：暗灰色	良好	胎土分析試料No.15
196	R-11 暗褐色土2	須恵器 壺	△5.7	肩部1/4 以下	外面：平行タタキ、一部ヨコナデ 内面：同心円状当具痕、一部ヨコナデ	精製 5mm以下の長石微量	外面：灰色 内面：灰色	良好	胎土分析試料No.14
197	P-11 暗褐色土2	須恵器 壺	△8.4	胴部1/4 以下	外面：格子タタキ 内面：同心円状当具痕	精製密	外面：オリブ黒色 内面：赤褐色	良好	胎土分析試料No.19
198	R-10 暗褐色土2	須恵器 壺	△8.0	胴部破片	外面：格子タタキ 内面：同心円状当具痕	密 2mm以下の白色砂礫	外面：明褐色 内面：明褐色	良好	胎土分析試料No.12
199	R-12 暗褐色土2	須恵器 壺	△7.5	胴部1/4 以下	外面：平行タタキ 内面：ケズリ後ヨコナデ、一部ユビオサエ	精製密	外面：褐色 内面：褐色	不良	胎土分析試料No.18

表69 包含層出土石器観察表（1）

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S54	Q-10	褐色土	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.3	
S55	西山	褐色土	石鏃	黒曜石	2.3	1.6	0.3	0.6	
S56	S-11	褐色土	石鏃	無斑晶安山岩	2.2	1.7	0.3	1.1	
S57	P-6	不明	石鏃	無斑晶安山岩	△2.5	1.8	2.5	0.7	先端部欠損

表70 包含層出土石器観察表（2）

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S 58	不明	排土	石錐未製品	黒曜石	2.4	0.5	1.2	1.0	
S 59	L-16	褐色土	剥片	黒曜石	5.2	2.1	0.8	7.2	
S 60	I-10	褐色土	剥片	チャート	3.1	3.0	1.4	8.5	
S 61	西山	不明	石核	黒曜石	1.8	2.1	2.2	7.8	
S 62	R-13	暗褐色2	スクレイパー	無斑晶安山岩	4.2	1.2	6.8	27.4	
S 63	Q-12	暗褐色2	スクレイパー	無斑晶安山岩	4.4	8.5	4.8	17.4	
S 64	西山	褐色土	磨製石斧	無斑晶安山岩	15.2	6.5	4.7	588.9	側面敲打痕
S 65	R-11	暗褐色	敲石	安山岩	14.2	5.5	8.1	900.0	表・側・上下面敲打痕
S 66	Q-12	暗褐色	敲石	安山岩	17.6	8.0	6.8	1160.0	表・下面敲打痕、下面剥離痕
S 67	東山南側	表土	敲石	安山岩	15.1	6.9	7.7	1050.0	上下面敲打痕
S 68	K-15	褐色土	凹石	安山岩	6.8	4.8	7.9	250.0	上面・下面に窪み
S 69	M-15	暗褐色	磨石・敲石	安山岩	10.4	5.0	8.2	630.0	表裏面磨面、上下面敲打痕
S 70	N-7	暗褐色	磨石・敲石	安山岩	16.8	5.0	7.1	750.0	表面磨面、下面剥離痕
S 71	K-9	暗褐色	磨石・敲石	デイサイト	14.8	5.3	8.3	770.0	上・下面敲打痕、表・側面赤色顔料付着
S 72	Q-12	暗褐色	磨石	安山岩	8.7	3.7	8.2	360.0	表裏面磨面
S 73	R-11	暗褐色	敲石・磨石	安山岩	△6.6	4.5	6.1	270.0	上部折損、側面敲打痕、下面磨面
S 74	P-10	暗褐色	磨石・敲石	安山岩	11.3	4.7	11.1	680.0	表面磨面、裏・側面敲打痕、下面剥離痕
S 75	P-17	不明	磨石	安山岩	△7.1	5.5	9.5	500.0	表面磨面、下部欠損
S 76	R-12	暗褐色	磨石	安山岩	11.5	3.4	3.7	210.0	上下面磨面
S 77	P-19	暗褐色	石錐	安山岩	6.0	2.5	6.1	100.0	上部・下部打ち欠き
S 78	Q-11	暗褐色	石錐	安山岩	9.5	2.8	6.8	260.0	上部・下部打ち欠き
S 79	谷部	表土	石錐	紫蘇輝石角閃石安山岩	6.7	2.4	6.0	110.0	上部・下部打ち欠き
S 80	P-16	不明	石錐	角閃石安山岩	6.8	4.7	6.9	260.0	上部・下部打ち欠き
S 81	P-13	暗褐色	砥石	細粒花崗岩	7.3	△3.4	4.0	69.5	砥面1面



写真11 S I 6 検出作業風景（南東から）



写真12 P 493土器152出土状況

## 第8節 製鉄・鍛冶関連遺物（分析資料）の考古学的観察

### 1. 調査の手順

製鉄・鍛冶関連遺物については、遺構の機能や工程を的確に把握するため、強力磁石（TAJIMA PUP-M）と小型特殊金属探知機（KDS METAL CHECKER MR-50）による抽出、および肉眼観察による考古学的な分類と構成を行った<sup>(1)</sup>。この中から、各遺構の機能や工程を代表すると思われる資料を金属学的分析が必要なものとして選定し、遺物の詳細観察表と実測図の作成、写真撮影を行った。資料の抽出、詳細観察表の作成は穴澤義功氏に依頼し、併せて分析資料の切断箇所についても指示をいただいた。

### 2. 遺物観察表の見方

遺物観察表は、島根県板屋Ⅲ遺跡<sup>(2)</sup>、殿淵山遺跡・獅子谷遺跡<sup>(3)</sup>における製鉄・鍛冶関連遺物の検討で採用された様式を基本とし、分析項目などを加えた様式を用いている。主な項目の見方は以下のとおりである。

- (1)遺物種類 金属学的分析を行う前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。
- (2)法 量 各遺物の長さ・幅・厚さ（各単位mm）・重量（単位g）を計測したものである<sup>(4)</sup>。
- (3)磁 着 度 製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」（TOKIN フェライト磁石 SR-3 寸法30×17×5mm）を用いて、6mmを1単位として資料との反応の程度を数字で表現したものである<sup>(5)</sup>。
- (4)遺 存 度 資料が完形か破片かを記す。
- (5)破 面 数 資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。
- (6)メタル度 埋蔵文化財専用を整準された小型特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のとおりである。なお、対象物中に、かつて金属鉄が内包されていた資料で錆化してしまったものは、錆化（△）と表示する。
- H（○）：Hは最高感度で、ごく小さな金属鉄（1～2.5mm）が残留することを示す。
- M（◎）：Mは標準感度で、Hの倍以上の金属鉄（4～5mm）が残留することを示す。
- L（●）：Lは低感度で、Mの倍以上の金属鉄（10～12mm）が残留することを示す。
- 特L（☆）：特Lは低感度でLの倍以上の大きな金属鉄（20mm以上）が残留することを示す。
- (7)分 析 どの分析をどの部分について行うかを○印で示す。
- (8)所 見 外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、および付着物やその他の状況について記す。
- (9)分析部位 資料のどのような部分をどのような目的で、調査・分析するか記す。なお、観察表下の実測図の網掛け部分は、分析に供した資料の採取位置を示す。
- (10)備 考 資料がどのような場所で、どのように生成されたと予想されるかなどについて記している。

(1) 穴澤義功 2001 「製鉄遺跡発掘調査の視点と方法—製鉄遺跡の本質に迫るために—」『平成12年奈良国立文化財研究所・発掘技術者専門研修「生産遺跡調査課程」資料』奈良国立文化財研究所

(2) 角田徳幸 1998 『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会

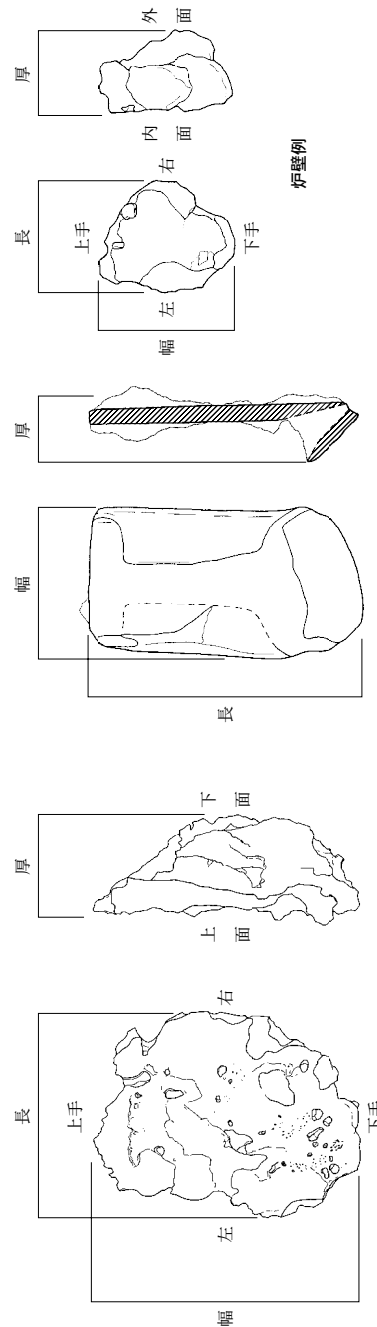
(3) 東山信治 2003 『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15 殿淵山遺跡・獅子谷遺跡（2）—分析・総括編—』島根県教育委員会

(4) 計測方法については、次頁凡例を参照のこと。

(5) 小林信一 1991 「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」『研究連絡誌』第32号 財団法人 千葉県文化財センター

表71 中道東山西山遺跡製鉄・鍛冶関連遺物分析資料一覧表  
(注：メタル又は胎土)

資料番号	報告書番号	地区名	遺構名	遺物種類	重量(g)	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	検鏡	硬度	EPM	X線回折	化学分析	耐火度	カロリー	放射化分析	断面樹脂	分析位置指定	採取方法	観察	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	前合図	X線透過	取り上げNo.
1	-	東山S-9	SB7-SK52	粒状滓(2点)	-	-	なし	粒状滓として	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	選択	○	-	○	-	-	-	-	
2	-	東山S-9	SB7-SK52	鍛造剥片(4点)	-	-	なし	鍛造剥片として	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	選択	○	-	○	-	-	-		
3	F19	東山T-9	SK53	含鉄鉄滓	57.5	5	特L(★)	メタル部を中心に	○	◎	○	-	-	○	-	-	-	○	短軸端部1/2	直線状の切断	○	-	○	○	-	338		
4	F24	西山R-14	SS3 2層	含鉄鉄滓	122	5	特L(★)	メタル部を中心に	○	◎	○	-	-	○	-	-	-	○	短軸端部1/3	直線状の切断	○	-	○	○	-	1061		
5	F28	西山R-14	SS3 2層	含鉄鉄滓	39	3	H(○)	滓部を中心に	○	◎	○	-	-	○	-	-	-	○	短軸端部1/2	直線状の切断	○	-	○	○	-	1288		
6	F35	東山R-10	P422埋土	流動滓(製錬系)	346	3	なし	滓部を	-	○	○	-	-	○	-	-	-	-	短軸端部2/3	直線状の切断	○	-	○	○	-	1195		
7	F36	東山R-10	P422埋土	含鉄鉄滓	13	4	錆化(△)	滓部を	-	○	○	-	-	○	-	-	-	-	短軸端部1/2	直線状の切断	○	-	○	○	-	1194		
8	F43	東山S-8	暗褐色土	含鉄鉄滓	362	7	特L(★)	メタル部を中心に	○	◎	○	-	-	○	-	-	-	○	短軸端部1/4	直線状の切断	○	-	○	○	-	897		
9	F57	東山R-11	暗褐色土	楕形鍛冶滓(小・含鉄)	190	5	なし	滓部を	-	○	○	-	-	○	-	-	-	-	短軸端部1/4	直線状の切断	○	-	○	○	-	1182		
10	F77	東山S-10	暗褐色土	楕形鍛冶滓(極小・含鉄)	51	5	L(●)	メタル部を中心に	○	◎	○	-	-	○	-	-	-	○	短軸端部1/2	直線状の切断	○	-	○	○	-	946		
11	F85	東山S-10	暗褐色土	鉄塊系遺物	136	5	L(●)	メタル部を中心に	○	◎	○	-	-	○	-	-	-	○	短軸端部1/2	直線状の切断	○	-	○	○	-	906		



製鉄・鍛冶関連遺物の計測値は、炉壁・鉄滓・鉄塊系遺物の場合、正位置の図の左右を長さ、上下を幅、横方向に展開したときの左右(縦方向に展開したときの上下)を長さとし、鉄製品については錆部分を除いた長軸長を長さ、短軸長を幅としている。なお、本文・観察表の記述における遺物の各面の呼び方は左の凡例図のとおりである。

鉄製品例

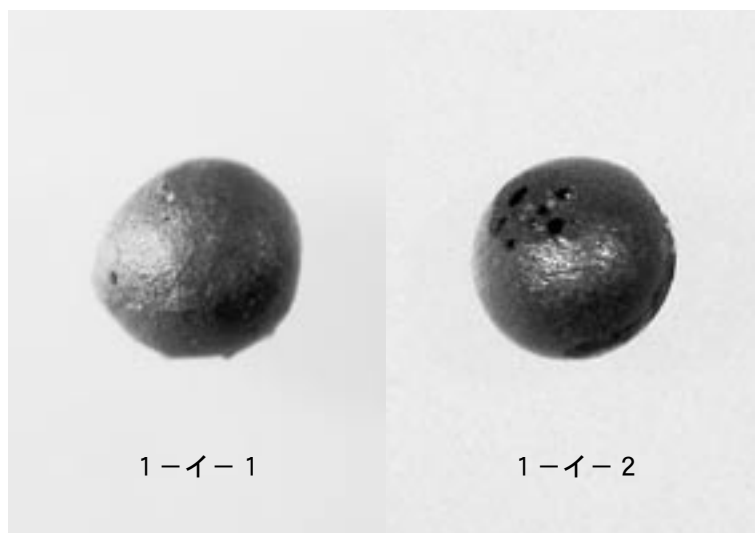
鉄滓・鉄塊系遺物例



資料番号 1										
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	—			項目	滓	メタル
	出土位置	SB7-SK52		時期：根拠	9世紀：出土土器				マクロ	○
試料記号	検鏡：NMH-1	法	長径	— mm	色調	—	遺存度	—	検鏡	○
	化学：—		短径	— mm		—	破面数	—	硬度	
	放射化：—		厚さ	— mm	磁着度	—	前含浸	—	EPMA	
	遺物種類 (名称)		粒状滓(2点)	重量	— g	メタル度	なし	断面樹脂	—	X線回折
観察所見	SB7とした、鍛冶炉を中心にもつ2間×3間の掘立柱建物の床面に設けられた、浅い土坑の土砂を水洗することにより分類された粒状滓である。鍛冶炉に接した土坑で、位置的にはいわゆる足入れ坑に相当する可能性が高い。調査はメッシュ法によらず、滓片や含鉄資料、さらには鍛造剥片を含む土砂として一括取り上げられたものを水洗分離したものである。洗面器と1.5mm目、並びに0.8mm目の篩で分離している。分類が完全に終了しない段階で分析資料に選択しており、鍛造剥片に比べて粒状滓の量は極めて少ない印象をもち、粒度幅も狭い。個別の資料は別表参照。									
分析部分	必要品を選択し、粒状滓として分析に用いる。残材返却。									
備考	標準磁石で強弱に分離しようとしたが、総点数が少なく、強磁着する個体は選択した時点では含まれていなかった。									

資料番号 1 粒状滓

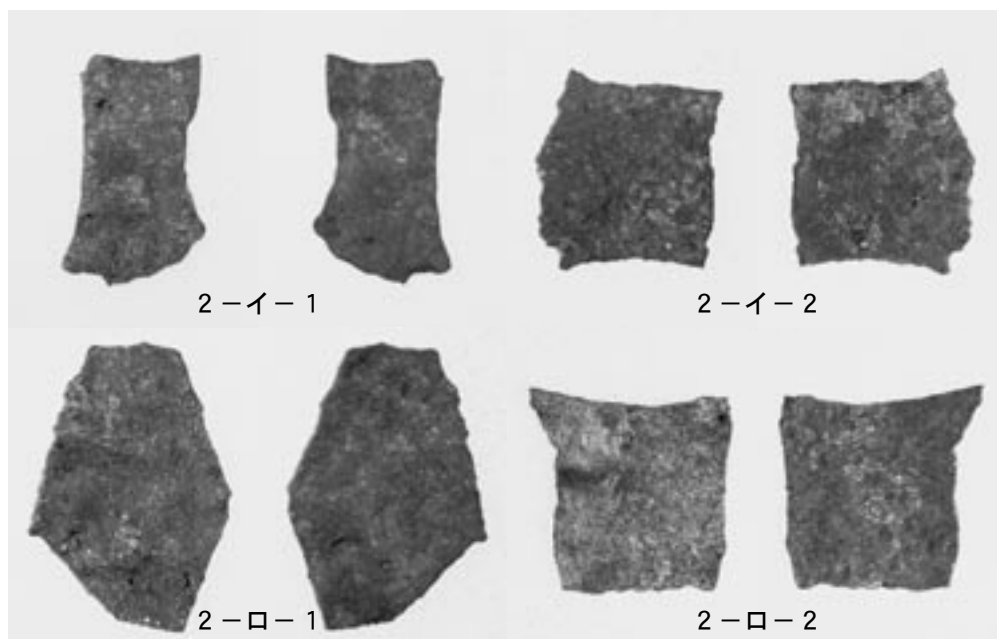
番号	直径(mm)	色調	形状及び表面	磁着	気孔
1-イ-1	1.3	青黒	きれいな球形で気泡を有する。	弱	あり
1-イ-2	0.7	青黒	きれいな球形で気泡を有する。	弱	あり



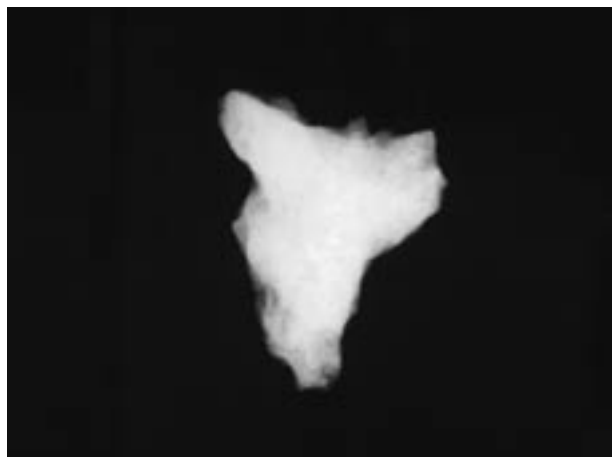
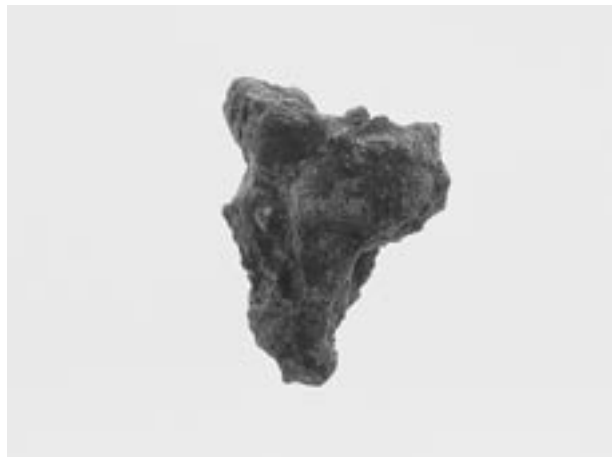
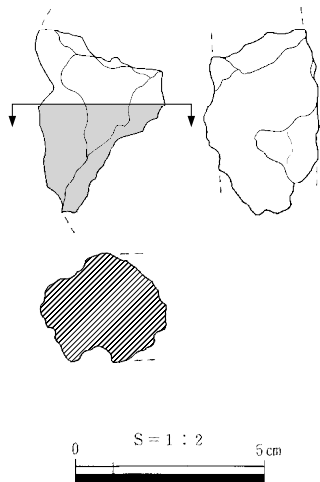
資料番号 2										
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	-			項目	滓	メタル
	出土位置	SB7-SK52		時期：根拠	9世紀：出土土器				マクロ鏡	○
試料記号	検鏡：NMH-2	法	長径 - mm	色調	-	遺存度	-	硬度	○	
	化学：-		短径 - mm		-	破面数	-	E P M A		
	放射化：-		厚さ - mm		磁着度	-	前含浸	-	X線回折	
遺物種類(名称)	鍛造剥片(4点)	量	重量 - g	メタル度	なし	断面樹脂	-	耐火度		
観察所見	SB7とした、鍛冶炉を中心にもつ3間×2間の掘立柱建物の床面に設けられた、浅い土坑の土砂を水洗することにより分離された鍛造剥片である。鍛冶炉に接した土坑で、位置的にはいわゆる足入れ坑に相当する可能性が高い。調査はメッシュ法によらず、滓片や含鉄資料、さらには粒状滓を含む土砂として一括取り上げられたものを水洗分離したものである。洗面器と1.5mm目、並びに0.8mm目の篩で分離している。分類が完全に終了しない段階で分析資料に選択しており、粒状滓に比べて鍛造剥片の量はかなり多い。個別の資料は別表参照。									
分析部分	必要品を選択し、鍛造剥片として分析に用いる。残材返却。									
備考	標準磁石で磁着の強弱を二分した上で、それぞれから2点ずつ選択した。ただし、選択した時点では総数はやや少なく、厚み幅も通常の鍛冶関連の分析資料より狭いものとみられる。									

資料番号2 鍛造剥片

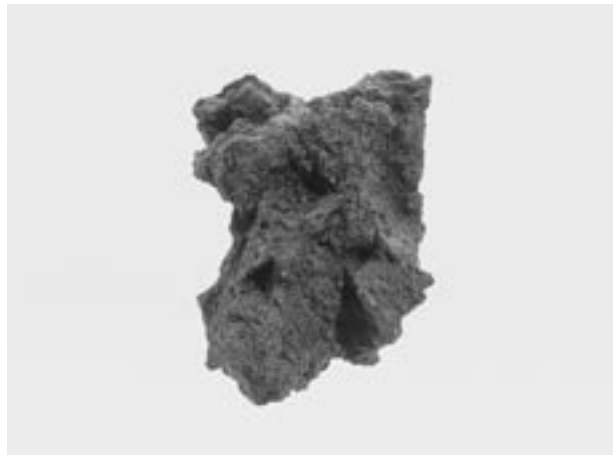
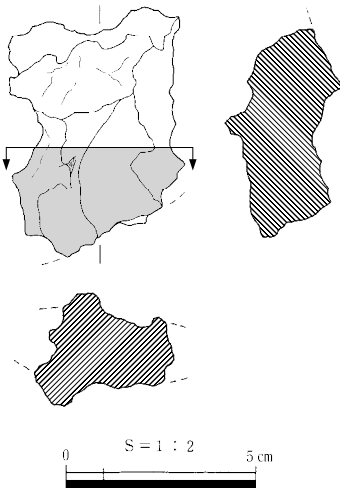
番号	計測値 (mm)			色調	表	裏	磁着	気孔
	長軸	短軸	厚さ					
2-I-1	4.7	2.7	0.2	青黒	やや凹凸を有する。	平滑である。光沢を有する。	弱	なし
2-I-2	2.2	2.2	0.12	青黒	やや凹凸を有する。	平滑である。光沢を有する。	弱	なし
2-O-1	3.4	2.5	0.12	青黒	やや凹凸を有する。	平滑である。光沢を有する。	強	なし
2-O-2	2.4	2.4	0.06	青黒	平滑である。光沢を有する。	平滑である。光沢を有する。	強	なし



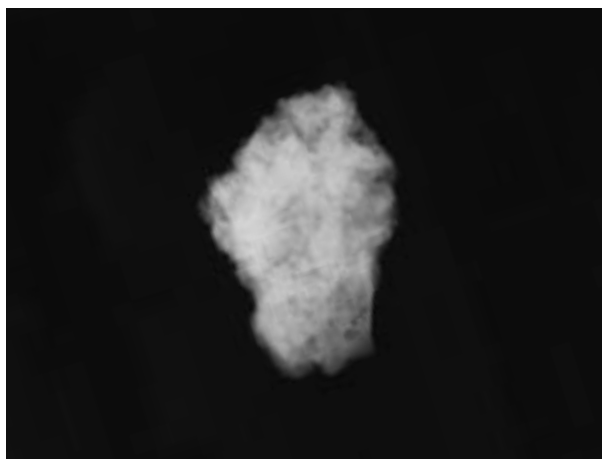
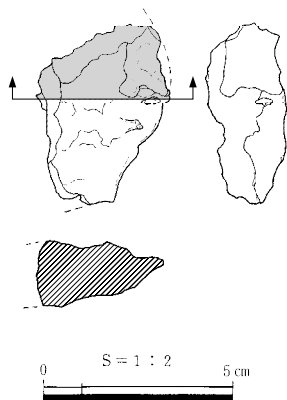
資料番号 3											
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F 19			分	項目	滓	メタル
	出土位置	東山T-9 SK53		時期：根拠	9世紀：出土土器				マクロ		○
試料記号	検鏡：NMH-3	法	長径	34mm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	破片	検鏡		◎
	化学：NMH-3		短径	49mm		地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	4	硬度		○
	放射化：-		厚さ	30mm	磁着度	5	前含浸	-	E P M A		
遺物種類(名称)	含鉄鉄滓	量	重量	57.5g	メタル度	特L(☆)	断面樹脂	○	X線回折		
観察所見	<p>平面、不整三角形をした含鉄鉄滓。上下面と左側面は生きており、右側面に大きな破面が残されている。破面数は4を数える。表面には不規則な凹みがあり、きれいな楕形とはなっていない。上面から側面は不規則な破状で右側面破面の中央部には1.5cm大前後の木炭痕が残されている。左側面下端から底面には微細な凹凸がある。一部は粉炭痕である。比重が高く、上半部を中心に小さな錆膨れや放射割れが確認される。磁着傾向も下面の中央部が弱く、上半部が強い。全体にイガイガした外観で滓の流動性は低い。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色。地は濃茶褐色から黒褐色となる。</p>										
分析部分	短軸端部1/2を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。										
備考	<p>不定形ではあるが、構成された資料群全体の傾向からみて、含鉄鉄滓と判断しておく。ただし、鉄部と滓部の分離が悪く混在している印象を受ける部分もあり、製錬系の含鉄の炉内滓の可能性と、現状では分離不十分の精錬鍛冶滓の両方の可能性があるものとみておく。磁着の強い割には、表面の錆化は弱い。</p>										



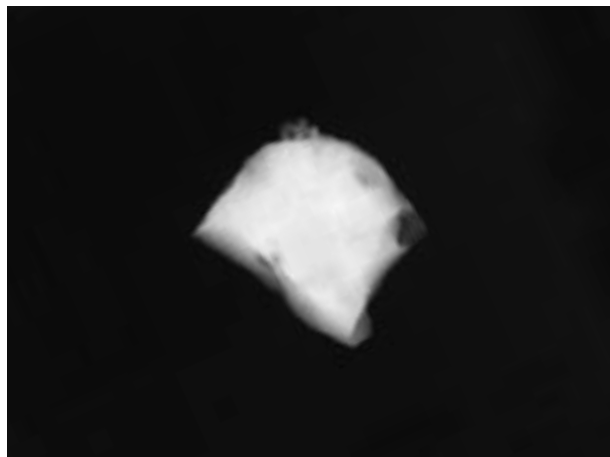
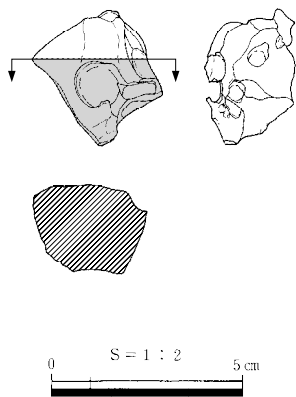
資料番号 4										
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F 24			項目	滓	メタル
	出土位置	SS 3-2層		時期：根拠	9世紀：出土土器					
試料記号	検鏡：NMH-4	法	長径 47mm	色調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	破片	マクロ		○
	化学：NMH-4		短径 66mm		地：濃茶褐色～黒褐色			破面数	5	検鏡
	放射化：-		厚さ 33mm		磁着度	5	前含浸			-
遺物種類(名称)	含鉄鉄滓	量	重量 122g	メタル度	特L(☆)	断面樹脂	○	X線回折		
観察所見	<p>平面、不整五角形をした含鉄鉄滓破片。左右の側面と上手側に加えて、内面には木炭痕が目立ち、下手側の側面と下面が自然面を推定させる。木炭痕は1.5～4.0cm大でいずれもシャープである。破面数は、はっきりしない面もあるが最低でも5面は想定できる。下手側の側面は傾斜した自然面で小さな凹凸を残し椀形鍛冶滓の下面のような質感を持っている。下面の中央部や側部寄りにも木炭痕が大きく、外見的には椀形鍛冶滓らしい部分は少ない。上手側側部には錆膨れの欠けや小さな錆膨れが確認される。磁着反応からみると含鉄部は、下半部が主体で下手側側面は特に強い。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、含鉄部は濃茶褐色となっている。地は濃茶褐色から黒褐色となる。</p>									
分析部分	短軸端部1/3を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。									
備考	<p>小さいながらも木炭痕がシャープで、各面に残されていることから、製錬系の含鉄の炉内滓の可能性と、含鉄の含鉄の精練鍛冶滓の可能性がある。SS 3はテラス状の遺構で含鉄の滓の比重が高く、その上を覆うように大形の石塊が出土している。明瞭な鍛冶址の証拠は得られず、性格不明遺構である。そのため、含鉄の滓2点をセットとして分析に選択している。分析資料No.4と分析資料No.5である。もし、製錬系の含鉄の滓であるならば、遺跡周辺での製・精練を読みとることができる証拠があるかもしれないということで、分析資料に選択している。</p>									



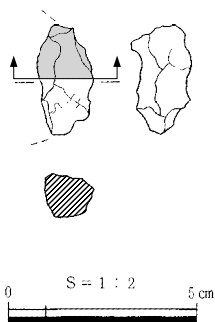
資料番号 5											
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F 28			分	項目	滓	メタル
	出土位置	SS3-2層		時期：根拠	9世紀：出土土器				マクロ	◎	
試料記号	検鏡：NMH-5	法	長径	35mm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	破片	検鏡	○	
	化学：NMH-5		短径	48mm		地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	3	硬度		
	放射化：-		厚さ	21mm	磁着度	3	前含浸	-	E P M A		
遺物種類(名称)	含鉄鉄滓	量	重量	39g	メタル度	H (○)	断面樹脂	○	X線回折		
観察所見	<p>平面、不整五角形をした厚さ1.9cmほどの含鉄鉄滓。上下面と右側面の一部が生きており、上手側から左側面が主破面である。下手側にも小破面が認められる。破面数は都合3面を数える。上下面ともややイガイガした滓で、浅い粉炭痕が残されている。滓の密度が不均一のためか破面もやや凹凸を残している。メタル度はH (○)と低いが、磁着反応はやや強い。上面のやや上手に黒錆のついた小破面が確認される。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色、地は含鉄部の影響のためか濃茶褐色から黒褐色となる。</p>										
分析部分	<p>短軸端部1/2を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。</p>										
備考	<p>断面形が薄手の含鉄鉄滓である。滓の密度がやや低く流動性には欠けている印象をもつ。製・精錬の区別がしにくく、原料砂鉄のチタン量の多少や炉内条件によっては温度不足により、鉄と滓の分離が不十分になるなど工程の差のみでは類型化しにくい要素もあり、分析結果をみたい。</p>										



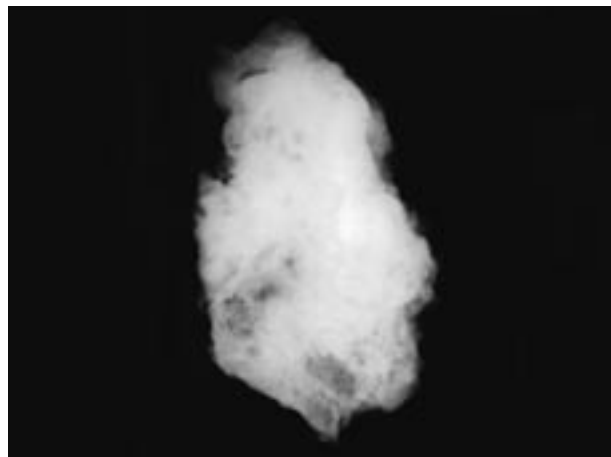
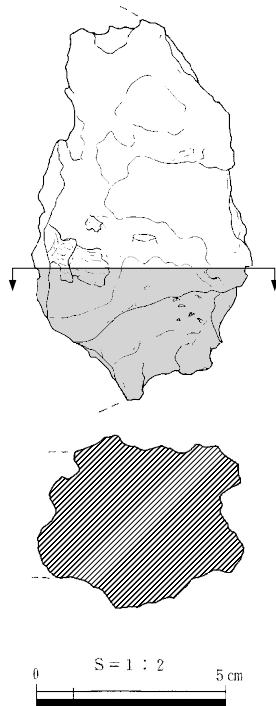
資料番号 6												
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡			遺物No.	F35				項目	滓	メタル
	出土位置	東山R-10 P422 埋土			時期：根拠	9世紀：出土土器						
試料記号	検鏡：NMH-6	法	長径	35mm	色調	表：茶褐色～黒褐色・紫紅色	遺存度	破片		析	マクロ	
	化学：NMH-6		短径	36mm		地：黒褐色	破面数	7	検鏡		○	
	放射化：-		厚さ	24mm		磁着度	3	前含浸	-		硬度	○
遺物種類(名称)	流動滓(製錬系)	量	重量	34.6g	メタル度	なし	断面樹脂	-		E P M A		
観察所見	<p>上下面と上手側の側部が生きている流動滓破片。側面の8割方は破面が連続し、破面数は7を数える。上面はきれいな流動状で表皮は黒褐色となっている。部分的にはかさねた紫紅色の色の酸化色も確認される。滓は緻密で結晶がやや発達しているためか光沢を持っている部分もある。気孔は極めて少なく上半部に横方向に発達した粗いものが認められる。下面は左右方向に浅い樋状で、上手側の端部が小さく突出している。また、5mm大以下のスコリアや石片を噛み込んでいる。色調は表面に薄く残る酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色。地も黒褐色である。</p>											
分析部分	短軸端部2/3を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。											
備考	<p>2cm強の厚みをもつ流動滓破片である。気孔は少なくガスが良く抜けて結晶が発達済みである。小片のため絶対的ではないが、通常は製錬系の流動滓と判断される資料である。流出鉍滓か流出溝滓かの区別は出来ず、下面に噛み込んでいるスコリアなどを評価して炉外流出滓の側部寄りの破片とみておく。本資料が出土したP422は東山のSB6・7の鍛冶炉をもつ掘立柱建物より下がった西山との間の谷部である。周辺には製錬系の遺構は全く確認されておらず、遺跡内でもかなり特殊な資料である。分析資料No.7は含鉄の滓で本資料と同一遺構出土品ということで分析用に構成されている。両者の分析結果をみて、P422の評価に繋げるべきであろう。</p>											



資料番号 7												
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡			遺物No.	F 36				項目	滓	メタル
	出土位置	東山R-10 P422 埋土			時期：根拠	9世紀：出土土器					マクロ	
試料記号	検鏡：NMH-7	法	長径	15mm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	破片	分	検鏡	○	
	化学：-		短径	29mm		地：濃茶褐色～黒褐色				破面数	5	硬度
	放射化：-		厚さ	12mm	磁着度	4	前含浸	-		E P M A		
遺物種類(名称)	含鉄鉄滓		重量	13g	メタル度	錆化(△)	断面樹脂	-	析	X線回折		
										化学		
										耐火度		
										放射化		
										X線透過		○
観察所見	<p>平面、不整楕円形をした指頭大よりやや大きめの小塊状の含鉄鉄滓である。左側面には明らかな破面で上手側にも一部は伸びているが、それ以外は自然面である。破面数は小破面を加えると5面となる。上下面と右側面は生きている可能性が強く、楕形鍛冶滓の側部破片のような外観を持つ。表面には側面も含めて1cm大以下の浅い木炭痕が残されている。含鉄部のためか上面上手側から上手側側部にかけて黒錆の吹いた割れ目が伸びている。磁着は弱いが上手側を中心に認められる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色。地は含鉄部もあり濃茶褐色から黒褐色となる。</p>											
分析部分	短軸端部1/2を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。											
備考	<p>外観的には楕形鍛冶滓の側部片的である。含鉄部があり錆化部分がスジ状に伸びているのは、放射割れによるものであろう。ただし、製錬系の含鉄部が存在する場合には、やや直線状に伸びる場合もあることに留意しなければならない。分析資料としてはP422出土の流動滓とセットになる含鉄系の資料を選択したところ、含鉄部が錆化はしているが顕鏡に耐える資料として選択・構成されたものである。分析資料No.6と同様セットとして分析結果を評価したい。なお、同一袋中にはさらに錆化の進んだ含鉄の滓がもう1点確認されている。</p>											

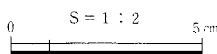
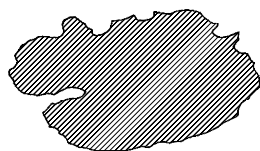
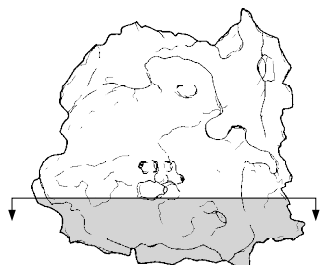


資料番号 8										
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F43			項目	滓	メタル
	出土位置	東山S-8 暗褐色土		時期：根拠	9世紀：出土土器					
試料記号	検鏡：NMH-8	法	長径 59mm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	破片	分	マクロ	○
	化学：NMH-8		短径 100mm		地：濃茶褐色～黒褐色				破面数	9
	放射化：-		厚さ 52mm		磁着度	7	前含浸		-	硬度
遺物種類(名称)	含鉄鉄滓	量	重量 362g	メタル度	特L(☆)	断面樹脂	○	析	E P M A	
観察所見	<p>平面、不整楕円形をした含鉄鉄滓の中核部破片である。上下面と右側部から下手側の側部が一部生きており、主破片は左側側部から下手側側部の上半部である。酸化土砂や錆膨れで不明点もあるが、少なくとも9面の破面を数えられる。上面は右側がやや小高く、襞状や木炭痕らしき凹みが認められる。短軸側の側部の一部には錆膨れの欠けや黒錆の滲みが確認される。左側面や下面の破面はキラキラした結晶の肥大を示す外観が認められる。下面から右側面を中心とした生きている面は、細かい粉炭痕または炉床土の圧痕に覆われている。付着土砂のため区別がつけにくい。見かけより比重が高く下面から右側面を中心に磁着が強い。含鉄と滓部の混在を窺わせる磁着傾向である。色調は酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色、地は濃茶褐色から黒褐色となる。</p>									
分析部分	短軸端部1/4を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。									
備考	<p>外観的には含鉄碗形鍛冶滓とも製錬系の含鉄の炉内滓とも断定しにくい資料である。結晶の発達は大形の精錬鍛冶滓や製錬系の炉内滓のいずれも、こうした傾向を持つ場合がある。外観的には鉄部と滓部がきれいに分離されていない可能性が強い。暗褐色包含層一括出土品であり、分析結果を加味して評価したい。</p>									

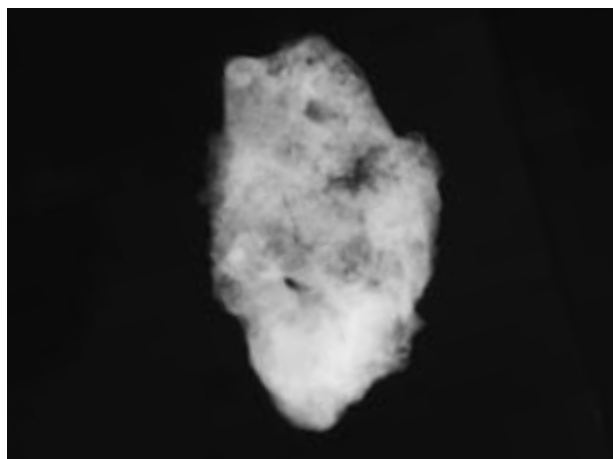
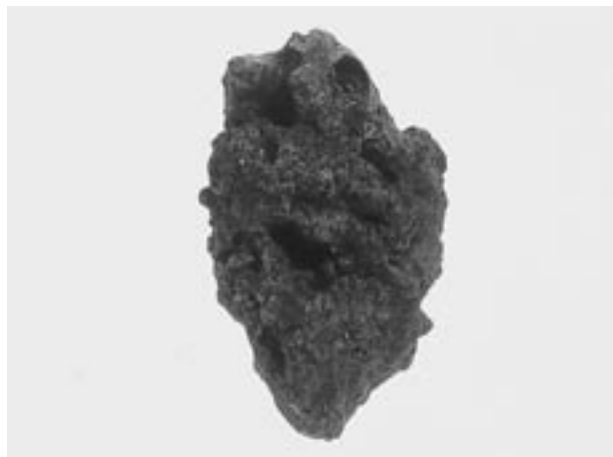
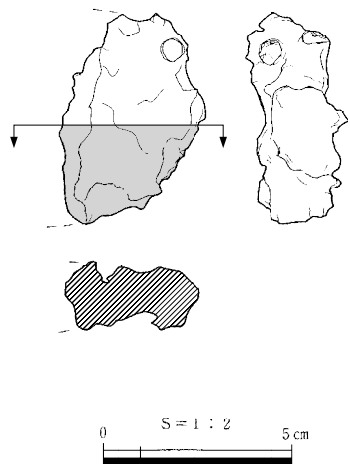




資料番号 9										
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F 57			項目	滓	メタル
	出土位置	東山R-11 暗褐色土		時期：根拠	9世紀：出土土器				マクロ	
試料記号	検鏡：NMH-9	法	長径	71mm	色調	表：茶褐色～黒色	遺存度	ほぼ完形	検鏡	○
	化学：NMH-9		短径	68mm		地：濃茶褐色～黒褐色			破面数	3
	放射化：-		厚さ	37mm	磁着度	5	前含浸	-	E P M A	
	遺物種類(名称)		梲形鍛冶滓(小)	重量	190g	メタル度	なし	断面樹脂	-	X線回折
観察所見	<p>平面、不整形をした小形の梲形鍛冶滓である。下手側から右側の側部の一部が欠けているほかは、ほぼ完形品である。原料投入単位が2～3に分かれているためか（側部1、側部2）、波状の不連続面をもち、わずかに隙間が残っている。ただし、滓の質感としては上下とも差はない。破面数は3を数える。上面は7mm大以下の木炭痕の残る平坦な滓部で、右寄りの中央部に羽口由来の黒色ガラス質の滓が確認できる。この滓上部の滓の厚みは1cm以下で、中間層の滓が最も外側に広がっている。下層の滓は中間層の滓の凹凸に対応するかのように厚みが変化しており、底面は平坦に近い。浅い木炭痕に覆われているが、鍛冶炉の底面が平坦であった可能性がある。滓はやや密度が低く、内部にも木炭を噛み込み隙間を生じている。色調は表面に部分的に残る土砂が茶褐色で、滓部は黒色となる。地は濃茶褐色から黒褐色。</p>									
分析部分	短軸端部1/4を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。									
備考	<p>一見表裏が逆のような部分もみられる平板な梲形鍛冶滓である。上面に残る羽口由来の滓部と下面に残る粉炭痕や鍛冶炉の炉床土の固着により、上下を区別した。本遺跡出土の滓類は、理由ははっきりしないが流動性に欠け、木炭痕の凹凸を含めてゴツゴツした印象をもつものが多い。これは、原料砂鉄の性質や羽口先からの送風に関わる問題であろう。</p>									



資料番号 10											
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F 77			項目	滓	メタル	
	出土位置	東山S-10 暗褐色土		時期：根拠	9世紀：出土土器						
試料記号	検鏡：NMH-10	法	長径	39mm	色調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	破片	分	マクロ	○
	化学：NMH-10		短径	55mm		地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	1		検鏡	◎
	放射化：-		厚さ	27mm		磁着度	5 <td>前含浸</td> <td>-</td> <td>硬度</td> <td>○</td>	前含浸		-	硬度
遺物種類(名称)	楕形鍛冶滓(極小・含鉄)	量	重量	51g	メタル度	L (●)	断面樹脂	○	析	E P M A	
観察所見	<p>平面、半円形をした極小の楕形鍛冶滓の側部寄りの破片。厚さは1.5cm前後で左側部が全面破面となっている。破面数は1を数える。表裏面や側面は1cm大以下の木炭痕が残り、肩部から側部は丸みを持っている。そのため通常の楕形鍛冶滓のような楕形の側面とはならず、全体が同じような厚さとなっている。変化があるのは木炭痕のためである。全体的にみれば上面がわずかの凹み、下面の中央部が突出しているようにもみえる部分もあるが、一部は錆膨れである。滓量が少なく流動性に欠けた含鉄の滓である。破面に凹凸があり、滓内部も密度が外面と同様そう高くない状態である。含鉄部は下手側の中核部と推定される。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は表面・地とも黒褐色である。</p>										
分析部分	短軸端部1/2を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。										
備考	分析資料No.7と似たような厚みをもつ含鉄の楕形鍛冶滓の半欠品である。小さな割には比重が高い。暗褐色包含層出土品であり、分析資料No.11と分析構成している資料である。分析資料No.11は現状では楕形鍛冶滓の一部とは考えにくい、厚みは比較的近似する。										



資料番号 11											
出土状況	遺跡名	中道東山西山遺跡		遺物No.	F 85			分	項目	滓	メタル
	出土位置	東山S-10 暗褐色土		時期：根拠	9世紀：出土土器				マクロ		○
試料記号	検鏡：NMH-11	法	長径	24mm	色調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	破片？	検鏡		◎
	化学：-		短径	30mm		地：濃茶褐色～黒褐色			破面数	1？	硬度
	放射化：-		厚さ	15mm	磁着度	5	前含浸	-	E P M A		
	遺物種類(名称)		鉄塊系遺物	重量	13.6g	メタル度	L (●)	断面樹脂	○	X線回折	
観察所見	<p>平面、小ぶりの不整台形をした鉄塊系遺物である。厚さ1.4cm前後で上手側の端部は錆膨れが大きく発達している。表表面や側面には細かい木炭痕が残されており、木炭層中で形成されたことを示している。はっきりした破面はなく、完形品または破面数1である。小さな割には磁着が強く、磁石に付いて持ち上げられるほどである。とくに下面の方が磁着が強い。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は表面・地とも濃茶褐色から黒褐色となる。</p>										
分析部分	<p>短軸端部1/2を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。</p>										
備考	<p>表裏面に残る細かい木炭痕から判断して、木炭層中で形成されている可能性が高い。椀形鍛冶滓の上下にまもらず、遊離している含鉄の鍛冶滓または精練鉄塊系遺物であろうか。表面に丸みが少なく、流動性に欠けているのが本遺跡出土の他の分析資料とも共通する。</p>										

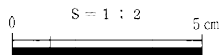
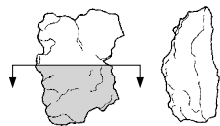


表72 中道東山西山遺跡遺構一覧表

竪穴住居・竪穴建物跡

遺構名	グリッド	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	床面積 (㎡)	主柱 (本)
S I 1	C 16	長方形	4.0×2.9	7	2
S I 2	T 8	隅丸方形	4.9×4.8	14.3	4
S I 3	T 10	隅丸長方形	3.5×3.0	8	
S I 4	Q 6	隅丸五角形	6.3×5.9	25.4	5
S I 5	Q 6	隅丸五角形	7.1×※6.3	※34.0	5
S I 6 a (古)	L 7~8	隅丸五角形	5.4以上×5.3以上	※21.0	5
S I 6 b (新)		不整形円形	直径7.1m	31	7
S I 7	O 9	隅丸方形	4.2×4.1	8.9	4
S I 8	M 6	隅丸方形	6.4×6.2	27.4	5
S I 9	H 8~9	隅丸方形	5.8×5.5	22.3	4
S I 10	J 9~10	隅丸方形	5.5×5.1	※14.9	※4

※印は推定値を示す

掘立柱建物跡

遺構名	グリッド	間	桁行 (m) 長軸/両軸 平均値	梁行 (m) 長軸/両軸 平均値	主 軸
S B 1	P 14	2間×2間	4.7/4.6	3.0/2.97	N-1°-E
S B 2	P 14	1間×1間	2.65/2.48	1.7/1.45	N-55°-W
S B 3	O13~P13	2間×3間	5.17	3.7/3.57	N-1°-W
S B 4	P13~Q13	2間×3間	4.9/4.8	3.4	N-1°-W
S B 5	S10~T10	2間×3間	6.12/6.0	3.6	N-23°-E
S B 6	S10~T10	2間×3間	4.6	3.2/3.18	N-18°-E
S B 7	S 9	2間×2間	4.5/4.4	3.3/3.2	N-12°-E

土坑

遺構名	グリッド	平面形	長軸×短軸-深さ (m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸×短軸-深さ (m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸×短軸-深さ (m)
S K 1	C 16	不整形	1.15×1.1-0.25	S K 32	M 4	隅丸長方形	0.8×0.67-0.17	S K 62	P 7	円形	0.67×0.66-1.37
S K 2	H 15	楕円形	1.45×1.04-0.45	S K 33	M 4	隅丸正方形	0.95×0.95-0.24	S K 63	R 6	隅丸正方形	1.02×1.01-0.35
S K 3	C 15	楕円形	1.14×1.04-0.24	S K 34	M 5	不整形	0.94×0.9-0.5	S K 64	Q 6	円形	0.75×0.71-0.84
S K 4	C 15	不整形	1.0×0.8-0.3	S K 35	M 6	不整形楕円形	1.23×0.77-0.41	S K 65	T 9	楕円形	1.5×1.15-0.63
S K 5	C 16	楕円形	1.05×0.9-0.22	S K 36	O 5	不整形	2.4×0.83-0.3	S K 66	T 10	円形	0.74×0.73-0.68
S K 6	L 15	隅丸方形	1.2×1.08-0.42	S K 37	U 9	不整形	0.75×0.62-0.3	S K 67	S 6	不整形楕円形	0.8×0.62-0.11
S K 7	E 15	楕円形	1.75×1.46-0.3	S K 38	T 9	楕円形	0.75×0.47-0.32	S K 68	T 10	楕円形?	△0.8×0.95-0.44
S K 8	M 14	楕円形	1.15×0.98-0.16	S K 39	T 9	不整形楕円形	1.05×0.56-0.24	S K 69	T 10	楕円形?	△0.7×0.75-0.19
S K 9	O 13	円形	0.91×0.8-0.45	S K 40	V 8	不整形	1.22×1.14-0.35	S K 70	S 9	不整形楕円形	1.02×0.76-0.28
S K 10	B 16	隅丸方形	1.22×1.15-0.31	S K 41	U 8	楕円形	0.95×0.6-0.43	S K 71	R 8	不整形楕円形	0.71×0.65-0.3
S K 11	D 16	※隅丸方形	1.3×△0.52-0.17	S K 42	T 8	楕円形	0.78×0.55-0.11	S K 72	Q 9~R 9	不整形	2.28×1.32 (0.41)-0.15
S K 12	P 15	隅丸長方形	1.77×1.02-0.3	S K 43	U 8	不整形	1.07×1.03-0.15	S K 73	Q 9	不整形楕円形	1.28×1.1-0.23
S K 13	O 14	不整形楕円形	0.95×0.8-0.37	S K 44	T 9	隅丸方形	1.1×0.9-0.11	S K 74	Q 10	楕円形	1.16×0.83-0.43
S K 14	G 15	楕円形	1.58×1.1-0.38	S K 45	T 8~U 8	楕円形	1.37×0.62-0.25	S K 75	R 10	楕円形	1.9×1.5-0.42
S K 15	H 16	円形	0.9×0.9-0.9	S K 46	T 8	楕円形	1.21×0.9-0.27	S K 76	T 11	楕円形	1.2×0.83-0.3
S K 16	N 13	不整形楕円形	1.1×0.9-0.39	S K 47	T 9	不整形	1.48×0.83-0.19	S K 77	T 11	楕円形	1.08×0.75-0.6
S K 17	E 16	円形	0.93×0.87-0.8	S K 48	T 8	不整形	1.12×0.6-0.13	S K 78	S 9	不整形	3.23×1.5-0.29
S K 18	P 14	不整形	1.85×1.55-0.3	S K 49	T 9	上: 円形	0.56×0.34-0.52	S K 79	O 7	楕円形	0.98×0.69-1.08
S K 19	L 15	楕円形	1.05×0.88-0.54			下: 円形	0.53×0.5	S K 80	M 7	楕円形	1.39×1.12-1.05
S K 20	R 13	楕円形	0.58×0.45-0.48	S K 50	T 9	楕円形	0.84×0.44-0.15	S K 81	J 7	隅丸方形	2.3×1.57-0.33
S K 21	Q~R13	不整形	1.28×0.85-0.38	S K 51	S 10	不整形	1.72×0.85-0.38	S K 82	J 7	不整形隅丸方形	2.05×1.45-0.26
S K 22	N 14	不整形	1.25×1.2-0.34	S K 52	S 9	隅丸方形	0.75×0.73-0.2	S K 83	I 10	不整形	1.0×0.92-1.45
S K 23	Q 13	不整形楕円形	△1.15×0.8-0.37	S K 53	T 9	楕円形	0.9×0.7-0.42	S K 84	L 8	不整形	1.2×1.03-0.22
S K 24	Q 13	不整形楕円形	0.9×0.7-0.25	S K 54	S 10	楕円形	0.75×0.6-0.43	S K 85	N 9	楕円形	2.04×1.3-0.5
S K 25	Q 13	楕円形	0.71×0.52-0.22	S K 55	T 8	楕円形	1.83×0.77-0.33	S K 86	M 8	隅丸方形	1.65×1.07-0.25
S K 26	P 14	円形	0.63×0.6-1.06	S K 56	S 8~T 8	隅丸方形	1.29×0.98-0.43	S K 87	M 9	不整形楕円形	0.85×0.68-0.11
S K 27	C 17	楕円形	0.95×0.8-0.2	S K 57	S 8	不整形楕円形	1.31×1.02-0.27	S K 88	O 9	隅丸方形	1.3×0.85-0.2
S K 28	Q 14	円形	0.74×0.72-1.27	S K 58	T 8	不整形	△1.03×△0.9-△0.5	S K 89	N 10	隅丸長方形	2.62×1.35-0.78
S K 29	R 13	方形?	0.51×△0.2-0.16	S K 59	T 9	楕円形	0.9×0.8-0.41	S K 90	M 9	楕円形	0.6×0.4-0.25
S K 30	M 4	不整形楕円形	0.9×0.7-0.16	S K 60	T 10	楕円形	1.02×0.52-0.26				
S K 31	M 3	円形	0.61×0.57-0.16	S K 61	S 6	隅丸方形	1.0×0.75-0.2				

※印は推定値、△は残存値を示す

段状遺構

遺構名	グリッド	平面形	長軸×短軸 (m)	深さ (m)	備 考
S S 1	D 15	方形	4.5×2.06	0.37	
S S 2	O13~P13	不整形楕円形	4.0×1.5 (0.8)	0.2	
S S 3	Q14~R14	不整形	△4.5m×3.0	0.35	土坑 - 長さ△3.08m 最大幅1.0m 深さ0.2m

△は残存値を示す

溝状遺構

遺構名	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	備 考
S D 1	O 8~O 9	8.5	0.4~1.0	0.1~0.2	S K 88を切っている